HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	人材開発研究へのアプローチ(3)
Author(s)	米山, 喜久治
Citation	經濟學研究, 49(2), 11-40
Issue Date	1999-09
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/32162
Type	departmental bulletin paper
File Information	49(2)_P11-40.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

経済学研究 49−2
北海道大学 1999.9

人材開発研究へのアプローチ(3)

米 山 喜久治

第3章 イメージとアイデアを具体的作品に

第1節 素朴な思いとイメージ

§1 風景の中に立つ

一人の研究者にとって若き日の夢やあこがれが，研究を進めていくための一つのドライビング・ホースとなるのではいだろうか。アメリカ・ペンシルバニア州の重工業都市ピッツバーグは科学的管理法（Scientific Management）の発祥地である。鉄鋼業にとって不可欠な原料である石炭と鉄鉱石を近くの鉱山から産出したピッツバーグは優れた原料の立地条件に恵まれてアメリカ鉄鋼業の拠点として発展したのであった[1)]。F.W. Taylor（1856−1915）はこの地で生産活動を展開する製鉄所おいて，近代的経営管理の基本的思想と方法である科学的管理法(Scientific Management)を構想したのであった[2)]。

1982年2月私は学問的な祖先の地ともいうべきピッツバーグを訪問し，100年の歴史を持つ製鉄所のまだ雪の残る工場に立った時，近代的マネジメントの確立に奮闘するTaylorの心意気が伝わってくるように思えて深い感銘を受けたのであった。

Taylorが，生活して思索した場に直接出かけて，風景，気候風土，人々の暮らしや雰囲気，食べ物をも自ら体験してみることによって彼を一人の人間としてまたより親しい存在として感じられるようになったのである。Taylorを彼が生きて活躍した空間に位置づけて，人となりや経営管理の思想と手法を理解するアプローチを取ったのである。

司馬遼太郎の歴史小説『空海の風景』は，こうした方法を意識的に小説を書くことに活用した具体例であろう。また同じく歴史小説『播磨灘物語』や『菜の花の沖』を，読めば，彼が，いかに優れたフィールド・ワーカーであったかを理解することが出来るのである。古文書を読破し，そこから独自の意味を引きだす文献研究家であり，さらには登場人物に深い共感を抱いた人間学の研究家であった事を知ることが出来よう。彼のこの方法が最も明確に打ち出されているのが，40巻に及ぶ紀行文学作品『街道をゆく』であろう[3)]。

司馬遼太郎は徹底して歴史的ドキュメントを研究し，その後現場に出て風景を把握し，それを正確に頭に入れて，これらをベースにして独特の人間理解を加えて人物像を創造して小説と

1) John Strohmeyer (1994), *Crisis in Bethlehem-Big Steel's Struggle to Survive*, University of Pittsburgh Press
John P. Hoerr (1988), *And The Wolf Finally Came*, University of Pittsburgh Press
William Serrin(1992), *Homestead-The Glory and Tragedy of an American Steel Town*, Random House
日本鉄鋼産業労働組合連合会（1988）『米国鉄鋼産業の構造再構築』（米国鉄鋼産業事情調査団報告書）日本生産性本部

2) F.W. Taylor／上野一郎訳（1967）『科学的管理法』産業能率短大出版部

3) 司馬遼太郎『街道を行く』（第1巻 甲州街道・長州路ほか）[1978]〜第40巻 台湾紀行 [1987] 朝日文庫

して描いていったのである。

外国旅行は本来その文化や社会や人間を理解することを目的としているが，流行のパックツアーで単に有名な都市や観光地を回ってお土産物を買い込んで帰国するのはあまりにも寂しいのではないだろうか。特に日本の将来を担うべき若い人々は，外国の同じ若い世代がどのようにして勉学に励んでいるのかを知る必要があるのではないだろうか。そのためには旅行先の国の都市の大学を訪問することを勧めたいと思う。外国の都市の大学とその図書館を見れば，その国の文化的水準を理解することが可能ではないだろうか。さらに学生食堂で，その大学の学生と同じメニューの食事を取ることが出来れば，理解を一層深めるとがであろう。彼らがどんな暮らしをしながら，どんな事を考えているか，また何を人生の目標して勉学に励んでいるのかを知ることによって，その国の将来の動向を知る一つの有効な手がかりを得ることが出来よう。言葉が通じて若い世代同士で交流を深めることが出来れば，そんな素晴らしい経験はないであろう。

我々は外国旅行での直接経験から多いに学ぼうとする知的好奇心を大事にしなければならないのである[4)]。

“学問の研究方法”と“小説の方法”の根本的な違いは，オリジナル・データの提出の作法にあるのではないだろうか。客観性を重視する学問は，データが最初に提示されて，その分析や解釈はその後に行われるのである。一方小説は，作者が自らのイメージによってデータに独自の解釈を加えて人物像を創造して，ストーリーを展開していくことにある。そこではイメージとデータが渾然一体となっていて，データだけが独立して提示されることはないのである。

現代の人文社会科学研究にとって“風景”が共通して重要な意味を持つているのではないだろうか。我々は“風景”の中に身を置くこと即ち，その場に自らの足で立つことによって身体感覚を通して事実やデータを理解する基礎が与えられるのではないだろうか。言わば「歩く速度と足で考える」とも呼ぶべき思考様式は，情報化時代にあっては不必要と考えられがちである。しかし情報洪水の中にあっては逆にその重要性が増大しているのではないだろうか。“風景”はデータや文章とは比較にならないほどの広さと深さを持つ多様な意味を我々に語りかけてくれるのである[5)]。

企業の経営管理を研究する場合も，自らその土地に足を運び，人々が生活し，働く風景に自分も浸ることがまず必要である。一人の生きる人間としてその場に自分を置いてみて，その土地の人々は何を人生の大事として働き，生活しているのだろうかを考えてみるのである。企業経営を担う経営者や管理者が，日常の企業活動の中でどんな困難に直面し，何を問題としてとらえ，それを解決するためにどのような理屈と方策を考え出したのであろうか。またそれを現場で実施するに際して人々の間にどのような議論がなされたのだろうか。我々はその場に立つ事によって初めてその意味を深く理解する手がかりを与えられのである[6)]。

4）青春時代の外国旅行が，いかに刺激に満ちた知的冒険であるかを語る1960年代の作品として小田実（1979）『何でも見てやろう』　講談社文庫

5）風景については
東山魁夷（1967）『風景との対話』 p.10～14 新潮社
内田芳明（1992）『風景とは何か－構想力としての都市』 p.12，14　朝日新聞社
岩田慶治（1992）『日本人の原風景－自分だけが持っている一枚の風景画』 p.177　淡交社
風景の中で根源的なものを「原風景」とすれば，この原風景はその人のものを見る視角や視点を決めるうえにおいて重要な意味を持っている。
『探究学序説』 p.150
テレビの情報「全てが重要という訴え方をするステレオタイプ化された番組の洪水」と自然界の「美しく豊かな情報」の差については，
Bill McKibben／ 高橋早苗訳（1994）『情報喪失の時代』　河出書房新社

6）河合隼雄（1997）「“臨床経済学”構築する時」日本経済新聞　1997年10月24号

§2　イメージの役割

現代日本は情報化社会，サービス化社会と云われるが，果たして人々は，それに対してどのようなイメージを持っているのであろうか。

昭和一桁以上の古い世代は，食べるもの，着る物，住むところにも不自由した戦後の貧しい時代を生き抜いて，高度成長を達成したのであった。彼らはまず生きていくために必要なモノを獲得することを生活の基本的課題とせざるを得なかったのである。1980年代以降既に物的に豊かな社会が実現されているが，「飢え」と「戦争」の原体験を持つ彼らの世代は，「モノ中心」の発想，物質主義から抜け出ることが困難ではないだろうか。それ故情報化，サービス化時代に必要とされる新しい価値を創造するためには自らの世代の歴史的検討が必要ではないだろうか。

人間は固有の歴史的時代を生きた原体験によって形成した価値観を基に人生を生きるのである。古い世代の「物質主義」，「所有への執着心」は，土地を担保とするバブル経済を生みだし，その崩壊後の方向転換は，未だ成功していないのである。

一方今後の社会は，若い世代の“情報”や“サービス”の生活の場への取り込み方がリードするのではないだろうか。抱いているイメージが，自らの仕事と生活の場面での，情報やサービスを生産したり，購入する時の行動様式に大きな影響を与えているのである。21世紀に生きる人々にとっては，その情報感覚が，生活スタイルだけでなく生き方をも左右する意味を持つのではないだろうか。

現代企業の存続と発展にとって重要な経営資源は，ハード及びソフト技術の特許であり，独自のノウハウである。特許もノウハウも，それは人間労働が，凝集したものである。現場の手作業と直接，間接に関係するモノ作りから離れて頭脳労働による抽象化が進んでいるのが，特に情報化ではないだろうか。対人関係において抽象化されると同時に身体化された知識や技が，発揮されるのがサービスであろう。例えばリハビリテーションにおける療法士の患者に対する医療行為は，その具体例としてあげることが出来よう。

若い人々が情報化やサービス化に対して，どのようなイメージを抱いているのかを探るのは問題を解く一つの鍵であると思われる。個人としても世代としても社会のマクロ傾向に直接，間接の影響を受け，かつ新しい傾向をそれぞれの生きる場において生み出しているのである。大学院学生の課題は，企業活動に焦点を合わせて現代社会を把握し，解明することである。研究を志す人は，まずは自らの知的生産活動（頭脳労働）に明確なイメージを持ち，頭と手が連動して具体的な作業を遂行するのでなければならない。

もしこうした論理以前のイメージが，あまり鮮明でないとすればその研究活動が，社会に貢献出来る豊かさを持つことは困難ではないだろうか。

“ものを考えること”は，料理に例えることが出来るであろう。いい料理のためにはまず新鮮で良質な食材（素材）を準備しなければならない。作業標準としての正確な料理法（recipe）を基本にして，よい素材を生かして適切なスパイスを使いうま味を出して作りあげなければならない。

同じ料理でも世界にはそれぞれの気候風土に根差した歴史文化的伝統があって和風，フランス風，イタリア風，ドイツ風，ロシア風，中国風など実に多様な料理法が存在する。

この中で日本料理の伝統は，よい新鮮な素材をきのまま，その持ち味を生かすことにあるのではないだろうか。

和風は，フランス風の調理法の複雑さにかなわない点があるかもしれないが，“素材のよさをそのまま生かす”ことについては，世界的に誇りうる伝統というべきであろう。

研究もこの料理法と同じで，素材となる情報やデータの鮮度や質が悪いのであれば，それを

たとえ高度な手法を駆使して分析しても，あまり新しい発見を得ることは難しいのではないだろうか。

現場で直接経験した出来事を，自らデータに作成することが，全ての出発点である。第1次情報に基づいて独自に組み立てられ問題の全体像を描く文章は，説得力を持っているのである。間接情報（第2次，第3次情報）を，いくら高度加工してみても問題の本質をえぐり出すことは出来ず，不鮮明な結論しか得ることは出来ないのである[7]。

§3　素朴な考えを育てる

日本の大学における研究は，自分の知的好奇心や疑問を徹底的に追及することが少なく，流行のテーマを通説に依存しながら議論する傾向が強いのではないだろうか。自らに対して“私は今どこにいるのか？”，“切実な事柄は何か？”を，問うこともなく，自己の存在とは切り離された「一般理論」や「抽象的概念」から思考をスタートさせているのではないか。渾沌たる現実から思い付きで切り取った事象の断面を説明しているのではないか。自己の生き方とは無関係に理論や概念の方に身を投げ出すような姿勢は，修得した既成概念や分析方法を無反省に活用する傾向を生んでいるのではないだろうか[8]。

社会科学研究にとっては自分の素朴な疑問と現代の社会的諸問題を媒介項を経ながら関連させていく思考回路が重要である。例えば自分が直接関わる具体的な事例から“意味”を抽出して，世界人権宣言に記された人類普遍の価値と関連させながら考えていく思考様式である。その中に生きている現代社会と自己の関係を考えるには，概念や論理に先立って身体感覚，感性とイメージ力でその場の意味を把握しなければならない。

発表とは無関係にまずは自分の偽らざる関心や疑問を，自分の言葉で表現してみることが必要ではないか。このような自己確認と自己対象化のプロセスを疎かにすることは，研究テーマへの切実感を欠落させ，それが研究のリアリティを失わしめているのではないだろうか[9]。

日本社会も歴史的に変化しており，それぞれの時代には固有の問題状況が存在している。ある時代に幼少年期を生きた人々は，それの経験を原体験及び原風景として内面化するのである。社会の歴史的な問題情況と原風景，原体験がその世代の思考と行動様式に大きな影響力を持っているのである。世代によってこれらが相違することにもっと注意を払う必要があるだろう。社会科学研究においては「世代論」が固有の位置を占めているのである[10]。若い世代は，他の世代の思考と行動様式を理解しようとすれば社会歴史的環境（問題情況）と共に把握しなければならないのである。また自らの世代も現代の問題情況と時代精神から全く独立して研究を推

7）第1次情報＝自分の五感を使って現場を見る
第2次情報＝現場にいた人から現場の話を聞く
第3次情報＝記者によって報告されたもの
第4次情報＝記者の情報が一度デスクに上がって加工される
という情報の分類については，
立花隆（1987）『知のソフトウエア』 p. 218　講談社現代新書

8）阿部謹也（1997）“生き方問わない経済学”
日本経済新聞　1997年10月22日号

9）疑問を抱き，言葉に発するには，心理的エネルギーが必要である。疑問を投げ掛ける言葉として，方言のもつ力に注目したい。例えば関西弁の“なんでやねん？”，“おかしいのとちゃうか？”など。
大阪弁については
大谷晃（1994）『大阪学』　第5章　経営書院

10）原風景と子供の頃の原体験が，研究者としての知的探究の原点であることを，描いたものとしては，
古島敏雄（1982）『子供たちの大正時代－田舎町の生活誌』　平凡社
自らの生き方と社会科学研究は，深く関連しており，自らの人生の生き方を，捨象して“社会的真理一般”の研究は，存在しえないのではないだろうか。研究者は，自らの生きた時代の問題情況と自らの問題提起，そしてそれをどのような方法でどこまで解いたのか を明らかにする必要がある。
阿部謹也（1997）“生き方問わない経済学”

進することが出来ないのことを自覚しなければならないであろう。

また留学生には，自分の経験した母国の社会と産業の実態を正確に把握することが必要とされている。母国で抱いた日本の社会や産業のイメージと来日後現実に経験する実態との落差の認識を大事にしてもらいたいのである。これを単に一時的なカルチャー・ショックなどとしないで，母国の歴史・社会的環境と価値を見つめ直す契機として自分の思考の原点を確立して欲しいのである。日本社会に適応する過程で自分の固有の視点を忘れて，常識的な日本人の視点に立つようなことになれば，それは留学の意味を半減させてしまうのではないだろうか。

§4　切実感が研究推進のエンジン

大学は，国境，組織，職業，年齢，ジェンダー等を超えた社会的異部門間の知的な『交流の広場』である。もちろん大学に所属する者だけのための存在ではない。まず自らもこの地球上で現代を共に生きる人間の一人であるという認識が，全ての出発点である。この認識がなければ組織を超えた理解と協力を得ることが出来ず，実りある思索と生きた学問の実現は不可能である。

研究テーマが，自分の心の底からわき出てきた切実な関心に基づいていることが必要である。次に“その世界にほれている”ことが，探究活動の持続力を決める事を知らなければならない。またそのプロジェクトが，自己の青春と人生を賭けたものか否かが研究への取り組みの姿勢を決めることを自覚しなければならない。キャンパスの日常生活であまり語られることがない，このような切実感やテーマにほれていることが，研究上の困難に直面した時に自分を支えてくれるのである。業績を上げるために自己の内的関心とは無関係な流行（テーマ，方法，フィールド）を追いかけることは，本来学問研究とは無縁の行為なのである。

新たに研究を始めたジャンルには，既に優れた研究が多く蓄積されている。世界の権威が，活躍するフィールドで，新参の自分が達成可能な研究のレベルを思う時，人は不安と無力感に襲われるのが常である。しかしこれを克服する力になるのは，“ほれている”ということである。テーマ（問題）が，完全にわが事となっていることつまりその問題を解くことが，自分の青春の課題であり，生き方になっておれば，そこから挑戦の勇気が湧いてくるのである。

学術論文では形式が確定しているため「問題提起」以前の問題意識を明らかにするスペースは与えられていない。研究者の内面が，表現されることはなく，かろうじて問題提起の部分にそれも抽象化されて示されるだけであろう。テーマに直接関係しないため，その重要性が認識されていないのが，“原風景”と“原体験”である。何を「面白い！」，「いやだ！」と思うのか？内面世界を自分の言葉で文章に表現し自己確認を行う必要がある。

このような問題に関心を持つに至った背景や関心の基底を明確にした文章は，自分が再出発する根拠地の役割を果たしてくれるのである。研究は，多くの制約条件の下において行われおり，現実的な社会科学研究は，問題の当事者の協力があって成立するものである。だが当事者の協力が順調に得られるとは限らず，テーマやフィールドを変更しなければならない場合も多い。複数のプランを立てて，状況に合わせてテーマや方法の組み替えを行うにあたり，重要な意味を持ってくるのが，原体験，原風景を明記した自己確認の文章なのである。

研究活動は，研究者の主体的な志によってスタートするが，その具体的展開は協力者との共同作業によって成立している。大学のスタッフという社会的立場が，資金や組織を動かすことによって可能にする研究もあるだろう。しかしそれが逆に社会的異部門間のコミュニケーションを妨げて事柄の本質に迫ることを阻害する場合もある。

何者にもとらわれない若い人々の志と行動力

こそは，こうした障害を乗り越えて新しフロンティアを開拓する可能性を持っているのである。

第2節　志を作品にまで具体化する

§1　志から問題提起へ

我々の課題は，自己の置かれた環境を見つめて，そこに存在する資源を生かし，可能性を発見していかに独創的な仕事を達成するかということである[11]。自分の能力を最大に発揮して一つの作品を創りだし，それが人々に評価してもらえるということである。

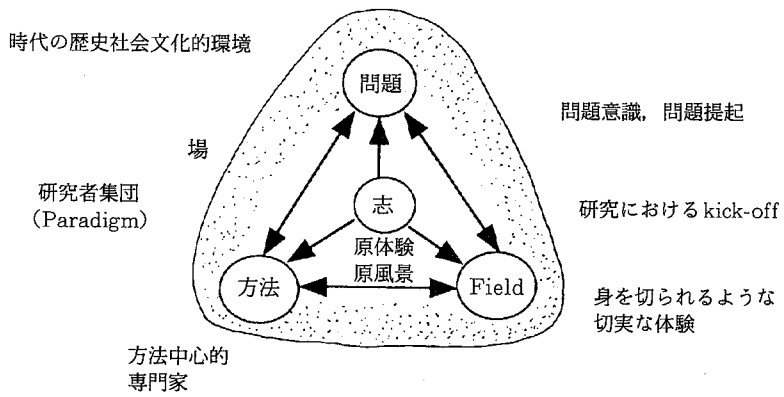
若い諸君はこの人生にはまだ無限の時間が，残されているように思っているであろう。しかし人はその人生において初々しい感性を持ってしなやかな思考が出来る時間を，そんなに長く持つことは出来ないのである。若い頃には初めから狭い専門領域に入り込むのではなく，出来るだけ知的関心の視野を広げて，その後に最も興味ある領域に焦点を絞って仕事を開始するのが正攻法ではないだろうか。日本の研究者にとって問題点は，専門家として優れていても地域社会が未成熟なため市民生活で多様な職業の人々との交流が少ないことである。それだけ社会的に未成熟な人間のまま人生を終ってしまう事である。自然現象を対象とする自然科学者にはやむを得ない場合もあるだろう。しかし社会科学の研究者が自分の研究を絶えず相対化する視点を失いライフワークのテーマとその成果をトータルに明らかする責務を忘れているのではないだろうか。

研究者は，自らが生きた時代の何を主たる問題として，それをどう解明して，問題解決に貢献したのかを，一般の人々に理解される形で提出しなければならない。現代日本社会の混迷と頽廃は深く，問題は山積し，その危機は迫まりつある，こうした状況にあって社会科学の研究者には，もはや単なる専門家＝「狭い範囲の物知り」であることは許されなくなっているのである。

「研究活動の正攻法」と題した第3－1図について説明をすることにしよう。人の持つ「志」が最も重要な意味を持っているため，図の中心に位置づけられている。人が研究活動を通して社会に貢献する志を抱く基盤になるものが，「原体験」，「原風景」である[12]。

就職活動のためのマニュアル本には“自己分

第3－1図　研究活動における正攻法



11) 米山喜久治（1990）『適正技術の開発と移転－マレーシア鉄鋼業の創設』　p.410　文眞堂

12) 米山喜久治（1993）『探究学序説』　p.163－166　文眞堂

析”という言葉がよく使われている[13]。これはフロイトの“精神分析”の影響を強く受けた言葉であろう。“分析”は人間の精神や人格までをも見えないメスで切開して“客観的”に要素に分解していく行為を意味しており，あまり適切な言葉とは考えられない。“自己分析”ではなく“自己把握”つまり“自画像を描く”，という表現が適切ではないだろうか。歪みの少ない自画像を把握することは，自分が何者であるかを，識ることである。それはまた自らの“アイデンティティ”を自覚する作業であると言ってもよいであろう。「私は一体どこから来たのか？」「私は今どこにいるのか？」「私はどこに行こうとするか？」ということを明確にすることなくしては，およそ研究は始められないのである。アイデンティティの基底には伝統文化が存在している。一人の子供の社会的成長（社会化）にとって，伝統文化が，深く関っていて，生まれて物心がついて活動を始める場の原風景，原体験（言語生活，食生活など）が極めて重要な意味を持っているのである。原風景，原体験を持ちえた場を故郷と呼ぶことが出来る。民俗学の宮本常一は，「子供が無心になって遊んだ体験を持つ空間」，文化人類学の川喜田二郎は「創造的な体験が，累積的に行えた場」が，故郷であるとしている。またゲーテは「命が，燃焼する場」であるとも語っている。多様な定義が可能であるが，故郷とは人生のピンチに立った時にその人に内面から生きる勇気とエネルギーを与えてくれるものではないだろうか[14]。急激な産業化と都市化に伴う社会変動に起因する現代日本人の故郷喪失は，その精神生活と創造性に大きな影響を与えているものと考えられる[15]。

伝統文化と地域性の象徴が，“方言”である。自らが素朴な疑問を発する時に思わず発する言葉が，方言である。身体感覚を内包したこの方言こそ，理性的，論理的な“問題提起”に先立って生まれてくる言語表現であろう。標準語で，美しく語るのではなく，関西弁の“ほんまかいなー”といつも疑問符を付けてリアリティを追求する姿勢が，関西における学問研究の原点に存在するものと考えられる。日本の人文科学，社会科学の創造性を復活させるには，“方言”による問題提起を尊重すべきではないだろうか[16]。

若い人が“ただ何となく”とか“取りあえず”などという理由で目的が不明確なままに大学に入学したり，はたまた大学院に進学することも珍しくなくなっている。基礎知識の習得に力点を置く学部レベルでは知的活動の出発点となる“問題意識”が，問われることは少ないかもしれない。しかし大学院においては“問題意識”は絶対の必要条件なのである。モラトリアムに埋没して自らの生き方の模索を怠っている人は，時代の本質に迫り得る研究テーマの発見は，困難ではないだろうか。

学部の卒業研究で自分なりの一仕事を達成する経験を持った人は，次の課題に挑戦すること

13) 中谷彰宏（1998）『面接の達人－バイブル版』ダイヤモンド社

14) 宮本常一（1984）『家郷の訓』　岩波文庫
川喜田二郎（1993）『伝統と創造』　祥伝社

15) 精神科医荻野恒一は，5－6年間の能登地方の調査を行い，そこでのうつ病患者の特徴を次の様に説明している。「ほぼ中産階級で明治の富国強兵の模範生であり，土地を守り，家を守り，伝統を守りというような人たちうの中から発生しているようである。つまり今のように文明が大きく変わろうとしている時に，それについていけない人たちからうつ病が発生している。」
米山喜久治編（1978）『野外科学の可能性』（移動大学八王子セミナールプロジェクト）　p.14
「テクノロジー文明のなかでの人間性の喪失」，「故郷をはじめから持たない者こそ，20世紀的人間である。」
荻野恒一（1976）『「文化摩擦」と精神病理』
p.52～54　新曜社
同（1979）『故郷喪失の時代』　北斗出版

16) 桑原武夫京都大学名誉教授の京都弁の講演と達意の日本語の文章にある相互関係を，考察する必要がある。
梅棹忠夫京都大学名誉教授による「京都弁」による講演記録については，「京ことば研究会のすすめ」
梅棹忠夫（1992）『梅棹忠夫著作集』（第17巻　京都文化論）　p.165～173　中央公論社

は，比較的容易であろう。だがこうした経験を持たない人にとっては，修士論文作成の課題は未知の経験となり一つのピンチを迎えることになる。指導教官や友人達がいくら励ましてくれても，自分自身の手と頭と体を動かさなければ，このピンチを乗り越えて前進出来ないのである。「ふるさと」において夢中になって遊んだ「原風景」と「原体験」を思い出して，そこを人間的存在の基底として忍耐力を持って自らの課題に取り組むのである。

次のステップは，設定した“テーマ”に従って問題提起を行なうことである。この問題提起の根底には，既に述べたような生活経験の中から抽出した切実な課題が存在している。研究を志した個人が抱く問題意識は，その時代の社会的雰囲気（時代精神）や問題情況からは，独立してはあり得ず，その強い影響を受けているのである。

例えば1960年代の日本社会の時代精神は，“技術革新”であり“成長”であった。それから30年以上を経た1998年現在においては，“地球環境保全”，“リサイクル”，“共生”などが，時代精神の一つとなっている。200年前のイギリスの産業革命以来人類は，物的な生活の豊かさを実現するために科学技術を開発し，それを産業活動に応用してきたのであった。そこには“地球は無限である”という暗黙の大前提が存在したのである。しかし1960年代のアメリカのアポロ計画による人類の月への探査の成功を伝えるTV番組の映像は，この認識にコペルニクス的変革を迫るものであった。それまで天文学者や地球物理学者などの一部の専門家が共有していた宇宙観，地球観を一挙に一般市民に共有させる働きをしたのであった。このTV番組によって一般市民も“地球は有限である”ということを身をもって認識し得たのであった。

しかし残念ながらこの30年間の大規模な産業開発は，地球環境を再生不可能なレベルまで傷つけるに至ったのであった。水の惑星，宇宙船“地球号”に乗り組んだ，何万種類の生物の1つに過ぎない人間（ホモサピエンス）が，他の生物を滅ぼし環境を破壊しながら，異常に繁殖しているのである。これが現代の実相である。予定調和を信じた成長の時代は終わりを告げて，解体の時代が始まっているのである。

21世紀初頭に学び，研究活動をスタートさせる若い人々は，古い世代が開拓して，蓄積してきたものを批判的に継承し，自らのオリジナリティを発揮して問題解決に貢献することが，期待されているのである。

§2　アイデアの熟成

アイデアも生まれたばかりの小さな萌芽から，それを基にすぐに作品の制作に取り掛かれるまで具体的に成長したものまで多様であろう。現代の知的生産にはスピードが，要求されているが，逆に“アイデアは3年寝かしておけ”と言われるように時間をかけてじっくりと熟成させる過程が必要ではないだろうか。複数の熟成させたアイデアがストックとして存在すれば，チャンスを生かしてそれを作品化出来るのではないだろうか。

学生には，将来の仕事として企業の企画部などに憧れる人が多いようである。実務の現場を見る事もなく，仕事の内容を具体的に知らない時には企画部の仕事はかっこいいと思われるであろう。だがそれを日々責任ある仕事とし遂行する立場に置かれれば，頭脳労働の厳しさを思い知らされるのではないだろうか。

新しいことを考え出す仕事は，簡単に思えるであろうが，現実はそんなに単純ではないのである。日常的に経験する小さな出来事の意味を深く考え，イメージ，アイデア，データを自分の頭と心と体に蓄積する努力を続ける事が出来ない人には，勤まらない仕事なのである。

ブレーンストーミング（Brainstorming）の方法を使えばアイデアはいくらでも出せそうに思われる[17]。しかし一見簡単に出せようなアイ

17) Alex. J. Osborn(1964), *Applied Imagination*／

デアも日頃から自覚，無自覚にかかわらずある一定の知的なエネルギー・レベルに達していないと出てこないのではないだろうか。“アイデアを3年寝かせる”ことを逆算すれば現在のアイデアは3年前に仕込まれたものが，核になって生み出されているのかもしれない。あるいは3年間も関心を持ち続けているテーマだからこそアイデアも比較的簡単に出てくるのかもしれない。

アイデアはふと浮かんで，すぐに消えるものであるとすれば，一瞬のひらめきを闇の中に逃がしてしまわないことが重要である。それにはまずメモによって記録して自覚的に考察する手がかりを残すことが必要である。自分にとって切実なテーマであれば，それを巡って思考は持続しているのである。これがす原動力となって，ある日ふと新しいアイデアが生まれる瞬間に幸運にも立ち会えるのである[18]。

単に卒業に必要な単位のために他人のノートをコピーするなどして急場をしのいだ人は，自分の頭で考える経験を持たないままに学生時代を終わってしまうことになる。

だが借り物で知的生産を進めようとしても，それは結局賽の河原の石積みに等しい作業になるのではないか。青春はその若い脳細胞が，可能にしてくれるみずみずしい感性や柔軟な思考さらにフットワークの軽さを特徴としている。こうした青春の可能性を自覚しない人は，ついに自分のオリジナルな作品を完成させることもなく人生を送ってしまうことになるのではないか。

社会的経験は，大きな刺激であるが，そこに反省がなければ自動的に思考力を磨いてくれるものではない。自分のものの見方や思考のくせは，異質の交流によって初めて自覚されるものであろう。ここに独学が陥りやすい困難がある。大学という組織における研究と学習に対する指導教官の役割は，“もう少し違った観点に立った方が，面白いものが見えるのではないか”と言って学生に自分の思考のくせ（視野狭窄）を自覚するきっかけを与える事ではないだろうか[19]。狭い視野のままで研究を進めると，針の穴に糸を通すような狭く展望のない研究にはまり込んでしまうおそれが多いのである。

§3　適切な問いと方法

ヨーロッパの大学の伝統を持つSwedenのGöteborg Universityでは，教授が対話を通して学生が自らの問題意識を醸成し，“正しい問い”を立てる訓練を行っている。問題情況を正確に把握して，問題を提起することが，研究の出発点であることが強調されている[20]。

一方1860年代に開国した後発国日本は「殖産興業」，「富国強兵」を国家目標に欧米先進諸国に追いつくことに懸命の努力を積み重ねてきたのであった。先進国からの技術移転センターとなった大学では，キャッチ・アップという課題に「正しい問いを立てる」ことに成功したかも

上野一郎訳（1978）『独創性を伸ばせ』　ダイヤモンド社

18) 梅棹忠夫（1968）『知的生産の技術』“発見の手帳”岩波新書
梅棹は，メモの重要性を「霧箱に映すひらめきの軌跡」と題して説明している。
梅棹忠夫“霧箱に映すひらめきの軌跡”　朝日新聞1998年4月10日記事

19) 吉田兼好『つれづれ草』第52段。「仁和寺にある法師」において「先達」の重要性を，既に1330年代に指摘している。

20) Professor Åke Ström (Sweden Göteborg University, School of Economics and Commercial Law）との対話。1996年10月 Göteborg Universityにて
中世以来の学問の伝統である人文科学の伝統を受け継いでおり，経済学研究においても人文地理学（Human geography）の研究が盛んである。例えば英語による文献としては，
Claes Göran Alvstam (1996) “Manufacturing and Services-National Atlas of Sweden”, SNA publishing, Sweden経済の現状と課題が歴史的背景と空間的な位置づけの中に明快に語られている。
適切な問いの重要さについては，
松田武彦（1981）『クエスチョンニングのすすめ』リクルート出版

しれないが，伝統文化を生かしながら内発的発展の道を探すことの重要性は，全く認識されてこなかったのである。つまり後進国日本にとっては近代化，産業化の過程で発生する諸問題に関して，先進国では［問題→解決策→実施結果］がセットで社会歴史的に実験済であったのである。それらは標準的知識として教科書にまでなっている事が多かったのである。

後から来る者は後発効果によって教科書を教材として模範回答を懸命に学習すればいいのであって，それ以外のことに余分なエネルギーを使う必要はなかったのである[21]。そのプラス面は，先進国モデルの学習によって短期間に産業化に成功した点にある。逆にそのマイナス面は国民の内発的なエネルギーを全て先進国モデルに閉じ込めて来たことである。そのため問題情況に主体的な問いを発し，問題解決の構想と解決策の実施における試行錯誤を十分に経験して来なかったことである。キャッチアップに成功して先進工業国と一線に並んだ途端に，学習すべき先進国モデルが消えてしまったのである。自らリスクを冒して開拓的な仕事に挑戦する勇気と知力を十分に養ってこなかったことが，今日の日本社会の停滞を生んでいるといえよう。大学における研究と教育も，先進モデルの移転（学習）と現場への定着（日本化）に専念して来たのであった。その結果問題発見のプロセスつまり直面する困難な諸問題に適切な問い立てて，研究を前進させる自前の方法論を開発し，磨いて来なかったことが，現時点における最大の障害となっているのである[22]。

「木によりて魚を求める。鶏を割くに牛刀を用いる」と言われるように民衆の間には目的と方法の整合性が重要であることの認識は，広く流布していた。明治政府は近代化と産業化を急ぎ，先進国モデルを出来るだけ短期間に学習することを目標としたのであった。文部省を先頭にして国民の叱咤激励が行われ，国民には“真面目に，一生懸命努力する”ことが，強く求められたのであった。先進国モデル（理論）特に生産技術が現場必ずしも有効でなく，日本人は伝統的な職人技によってそのギャップを克服する努力を積み重ねたのであった[23]。

欧米の大学ではデカルト哲学の伝統に立って合理的思考と目的と手段の整合性が強調され学部のリベラル・アーツ教育でも方法論が教育されてきたのである。こうした知的伝統と教育内容は，欧米からの留学生が持つ知的態度と方法論意識に強く反映しているといえよう。「問題と結果」だけに関心を持つ傾向の強い日本人学生と比較した時その差異が明確となっている。

中国文明の影響下におかれた韓国，日本では，弟子は師匠の仕事を忠実になぞってその方法を技として修得することが求められている。弟子が与えられたテーマに対して新しい世代の視点から“問題を提起すること”や，伝統的方法の有効性への“問い”を発することは，許されなかったのである。入門した流派の固有方法への習熟度が，その人の腕を評価する基準となったのである。その流儀の存在に危機をもたらす他流試合は不文律として禁止されたのであった。この掟を破る者は，流派から追放されたのであった。

日本の家元制度は伝統芸能（茶道，華道，香道など）の継承のために形成された組織である。世界に開かれた知的交流センターであるべき日

---

21) Alexander Gerschenkron(1966), *Economic Backwardness in Hisrorical Perspective*, The Belknap Press of Harvard University Press

22) 東京大学で近代医学を指導したお雇い外国人であるトク・ベルツは，日本人が「最新の成果を彼ら（お雇外国人）から引き継ぐだけで満足し，その成果をもたらした精神を学ぼうとしない」と指摘している。《理念（哲学）－方法－対象－成果》を全体として受け入れ理解しようとするのではなく，成果＝技術は取り入れるが，それを生み出した文化や思想を拒絶する日本人の歴史的に形成された知的資質が存在する。
T. Barz／菅沼竜太郎訳（1979）『ベルツの日記(上)』p.23　岩波文庫

23) 米山喜久治（1990）『適正技術の開発と移転』P.22～23　文眞堂

本の大学が，講座や研究室を中心に家元制度のような雰囲気を持っているのである[24]。その根本的な原因は，明治以来先進国からの文物の導入に際して大学が，東京大学を頂点にして“輸入代理店”的機能を果たして来たことにあると考えられる。研究室や講座では特定の研究領域と方法だけが，暗黙の内に前提とされているのである。それゆえ健全なアマチュア精神を発揮して必要な研究方法論は何かを，根本的に検討する知的態度が養われないのである。

指導教官に知的にも人間的にも優れた人を得た場合は，問題がないであろうが，もし問題意識や方法論意識が薄弱であれば，それが学生達にマイナスの影響を与えることとなる。こうした日本の大学における方法論の教育・訓練不足（指導教授の方法論を学生が伝統芸能の技のように伝承する）は，もはや現代社会における複雑さの増大する諸問題の解明と解決には，対処できない段階に達しているのである。

例えばノコギリだけしか使えない人を“大工”とは呼ばないのである。ノコギリ，カンナ，ノミ，金槌，手斧など一通りの道具一式を使い込んで，施主の意図を十全にくんで家を建てる能力を持つ人を，“大工”と呼ぶのである。

映画“Modern Times”のチャップリンが演じる未熟な作業者は，親方の所有する道具箱(Toolbox)を持って，機械職場で働いている[25]。

親方の指示に従って機械職場のあちらこちら動き回るのであるが，たった一つの道具すら適切に使う事が出来ず，へまばかりやってしまう喜劇である。近代的な工場現場作業の意味と道具について鋭い洞察に満ちた作品であると言えよう[26]。

パソコンの画面においてもアイコン“Toolbox”は各種の作業が出来るソフトが，組み込まれていることを示している。知的生産においても複数の方法を，対象に応じて適切に使いこなす能力が，必要とされているのである。

方法論はその主要な特性によって2つに分類することが出来る。それは

(1) 質的方法（Qualitative Method)。事象の質的側面を把握しようとするものであり，質的データを取り扱う方法論。その代表してKJ法が存在する[27]。

(2) 量的方法（Quantitative Method)。

事象を観測・計測の尺度を決めて測定し，計量的データを作り，それに基づいて，問題を把握するアプローチである。その代表は統計的手法である。日本で開発された多変量解析がこれに加わる。ただし統計学では母集団の均質性が前提にされていることを忘れてはならない。

21世紀の困難な諸問題に挑戦しなければならない若い人々には，こうした方法論の双方を修得する必要があるだろう。日本の大学では，方法論の体系的教育ためのカリキュラムは未整備であるが，専門領域を超えて，多様な方法論を学ばなければならない。

基礎的な方法論を修得した後に開始する研究活動では，テーマに関して”問題”が最も典型的に発現している場を選定すること重要である。研究における事例研究（Case Study Method）の有効性と限界は，この点と関連しているのである。個別具体例からの一般性的傾向と原理の

---

24) 米山喜久治（1993)『探究学序説』 p.61 文眞堂
西山松之助（1962)『日本の家元』 p.47～48 弘文堂新社

25) Charles Chaplin “Modern Times －A Story of Industry, Individual enterprise-humanity crusading in the pursuit of happiness” 1936

26) Industrial Engineeringでは“Method Engineering”というタイトルの下に生産工程の合理化のために必要な方法論がセットで議論されている。
生産工程に対象を限定したときには，Time & Motion Study等の方法が有効であろうが，工場全体のシステムを問題にしたときには，果たしてこうした方法だけで十分であるとは言えず，解明すべき問題（対象）にふさわしい新しい方法の開発が必要である。
日本経営工学会編（1975)『経営工学便覧』 丸善

27) 川喜田二郎（1967)『発想法』 中公新書
同　　（1986)『KJ法－混沌をして語らしめる』中央公論社

抽出と理論化が問われているのである。ドイツの弁証法哲学者Hegelは，小宇宙は，大宇宙の陰を宿していると語り，真理は，細部に宿るとも語っている。サンプル数が1000を超える大量観察データからは一般的傾向を読み取ることが出来る。他方質的方法は個別具体事例を質的に深く探究して，そこに隠された問題の構造と本質を解明していくアプローチである。これらは，お互いに矛盾するものではなく，相互に補完すべきものなのである[28]。

次に(3)研究の仮説，理論枠組みの設定が，必要である。研究には，仮説を発想する段階とそれを調査や実験で検証する段階がある。この仮説のためのアイデアを作りだす方法としては，1938年にアメリカの広告会社のJ.オズボーンによって開発されたブレーンストーミング（Brain Storming）がある。これは

(i)批判厳禁（他人や自分のアイデアにも批判をしてはならない

(ii)自由奔放（思いついたことをためらわずに出す）

(iii)量を求める（一見つまらなさそうなアイデアでも数を多く出すこと）

(iv)他人のアイデアの結合改善を求める（他人のアイデアに便乗することに優先順位が与えられる）[29]

の原則に従い，新しいアイデアを創りだそうとするものである。このh方法は開発者の広告会社における原体験を反映して小集団による集団思考が前提にされている。個人研究の場合には，一人でこの全てのステップを踏まなければならない。次に個人及び小集団で出されたアイデアもその意味内容が明確な言語表現に磨きをかけなければならない[30]。次はこうした洗練され安定性のあるデータを組み立てて，統合して仮説を発想するステップへと踏み出して行くのである[31]。

§4　志，問題発見，問題解決

現代企業において発現する諸問題のどの側面に焦点を合わせるかによって研究のアプローチが異ってくる。主要な経営資源である《ヒト，モノ，カネ，情報，エネルギー，時間，空間》のどの要素に注目して，経営活動を把握するのかによって問題の立て方が違ってくるのである。企業の社会的責任，トップマネジメントのリーダーシップ，研究開発部門のハード，ソフトの技術開発力，企画部の商品企画力，顧客との接点であるマーケティング，生産現場のモノ作りと作業者の腕など多様な角度からの断面の設定が可能である。これに従って問題の設定が行われるのである。渾沌を凝視し，ある事象に隠された意味を発見するための段取りが，問題形成であるといえよう[32]。

企業の持つ重層的，多面的諸問題を解こうとする場合，それぞれの知的関心によって切断面は変化し，アプローチも変わってくるのである。この場合最も大事なことは，最初から部分に集中するのではなく，まずは問題をマクロ，ミクロの環境の中に位置づけてその全体像をとらえた上で，自分が中心的に関心を抱く部分に焦点を絞り込んでいくことである。多面的，重層的な問題を解くことは，あたかももつれた糸の塊をほどいていく試みに等しく，糸口を引きだす

28) A.Strauss & L.Corbin (1990) "Basics of Qualitative Research" SAGE Publication

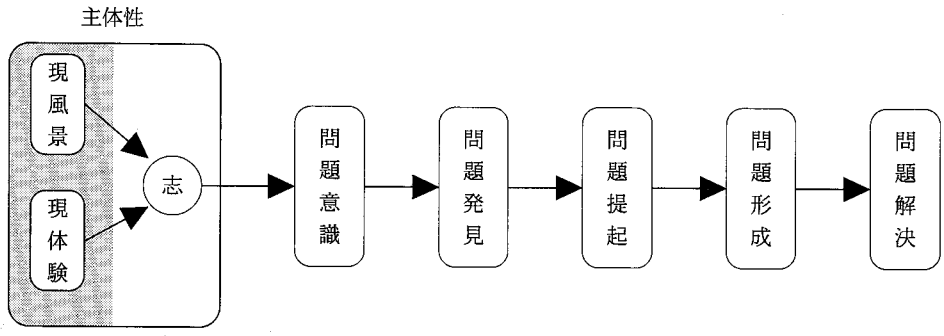
29) J.Osborn／上野一郎訳（1958）『独創力を伸ばす』（新版）p.152～182　ダイヤモンド社

30) BSの内容は，発言した本人にとっても不明確な場合が，多く，これを独立したアイデアとして利用するためには，その意味内容を再確認するステップが不可欠である。三菱樹脂(株)の研究所において化学技術者青木貞巳をリーダーとして，チェックのステップを入れた新しい修正BS法が開発された。これをMBSという。
松尾隆（1969）"組織を蘇らせた問題解決法"『マネジメント』　1969年6月号

31) 己を空しくして既成概念を捨ててデータの新しい組み合わせ，グループ編成によって新しい仮説を発想しようとする方法としてKJ法がある。

32) 土方文一郎（1968）『管理者の問題形成』　産業能率短大出版部

第3－2図



ことが，研究のアプローチであるといえよう。事象への焦点の当て方や問題としての解き方によって必要とわれる基礎知識も大きく変わってくるのである。

このような人間の知的探究活動の出発点となるのが“志”である。志がなければ問題意識も芽生えないのである。さらにこの問題意識がなければ，日常的に触れている事象の中に，何ら疑問も感じることがないのである。疑問のない所に知的探究活動は存立しえないのである。

1960年代以降の高度経済成長期の日本人の働きぶりは，“モーレツ社員”であり，“仕事中毒”とも呼びうる情況であった。しかし1983年のプラザ合意後の急速な円高による企業の事業再構築（リストラ）は，従業員にさらなる職務遂行への努力を要求したたのであった。その結果“メンタルヘルス問題”を通り超えて“過労死”，“過労自殺”が，多数発生するようになったのである[33]。従業員が，“過労死”しているにもかかわらず，有効な解決策を実施しないのが，残念ながら昨今の不況に沈む日本社会の実態である。“過労死”を単に従業員の健康管理の自己責任問題として取り扱っては実態が正確に把握されていないのではないか。企業の従業員管理正否，労働負荷や労働時間の適切さが問われるのである。さらにもし企業別労働組合が存在しているならば，組合員の労働条件の維持向上のために本来の機能を果たしているのか否かが，問われているのである。次に労働行政を担う労働基準監督署が，働く国民の労働条件と健康の維持改善のために有効な監督指導を行っているのか否かが問われているのである。

このように同じ“過労死”を問題として取り上げる場合においても，マクロな日本の社会システムの問題[34]，企業の人事・労務管理問題，従業員の自己管理能力問題，労使関係問題，労働行政問題など，どのような観点から問題を提起するかによってその解き方は，大きく変わってくるのである。

このように企業における《ヒト》に注目しても例えばA.Smithの古典経済学で仮定された経済人に発する“経済人モデル”（economic man）は，合理性，経済性を重視して利益極大化と最小費用指向の意思決定を行う人間行動を措定している。次にH.A. Simonは，企業経営

33) 社会科学研究においては，個人が直面する問題を，ある特定の個人の資質や行動様式に還元することなく，個人がおかれた社会的環境，憲法に規定された個人の権利と義務・責任など個人を超える社会的諸関係に焦点を合わせて検討しなければならない。
川人　博（1998）『過労自殺』　岩波新書

34) Karel. van Wolferen／西岡・篠原・中村訳（1987）『人間を幸福にしない日本というシステム』
毎日新聞社
C.A Rike “Oposing the System”／広瀬順弘訳（1998）『システムという名の支配者』　早川書房

における人間が，合理性の最大化を追求しつつ，限界を認識して現実的意思決定行動を展開するとする《管理人モデル》(administrative man)を提示している。またA.Maslowは，人間の成長と欲求段階モデルを提示している。さらに最近のパソコンとそのネットワークの発展は，《ネットワークマン・モデル》を提起している[35]。このように同じ企業における人間を，問題にして取り上げるにしてもどのようなモデルを採用するかによって議論の展開の仕方は大きく変化するのである。

次に我々を含めて社会は歴史的存在であることに注意しなければならない。工学的発想は，人間の理性と論理と技術によってこの歴史性を克服することが出来ると考える傾向があるようだが，これには注意をしなければならない。

我々の知的探究活動はその単位に《問題発見→問題形成→問題解決》というプロセスを持っている。このような認識と行動の中にあって，工学的手法であるIE，QC，OR，SEなどは，『問題解決』のステップに有効なのである。事象をある尺度で観測・計測して得られた定量的データによって数学的処理が可能となり，解法のアルゴリズムに従って演算処理をすればその解を得ることが出来るのである。

我々にとっては現代の企業経営の実態が，直接の関心であるが，それを時系列(Time Series)と共時的空間（地域・国際比較)(Cross Section）の中に位置づけて考えなければならない。経営史，産業史，経済史，科学技術史，社会史，労働史などの歴史的な視点が，欠落しては21世紀の諸問題の適切な解決策を構想し，実施することは出来ないのである。

§5　研究の進展プロセス
＝長い準備期間と非線形＝

経験原則に従えば研究は，ある時準備を始めてもその進展は，Y＝axで表されるような直線の軌道に乗って時間の経過と共に着実に成果を出すことは出来ないのである。

もちろん研究の指導者や協力者が，テーマと関連資料，データ，実験装置，調査対象などを準備しさらに方法論も訓練してくれるのであれば，初期条件がかわることになる。最初に蓄積として与えられた(b)からスタートする軌道に乗った研究の進展が期待されよう。しかしながら人間の思考活動は，リニアに進展するものではなく，研究の進展も，必ずしも直線的に進むとは限らないのである。長いジグザグの模索期間，リードタイムを経てやっと少しずつ立ち上がって行くのである。忍耐強い探究の結果Key Data，Key Personに出会う事が出来れば研究はそれを契機にして急速に進展して，目的とする成果に到達することが可能となる。

以上は個人の研究活動を想定したモデルであるが，チームを組んで仕事をする場合には，もっと複雑なプロセスをたどるものと考えられる。仕事の基本理念と目標の設定，新しいアイデアの醸成，実験・調査活動における分業，情報共有化，本質の探究，仮説の発想，検証，結論に至る全てのプロセスで個人の場合よりも複雑な集団思考が繰り返されて推進されることになる。

日本人の得意とする突貫工事は，納期ぎりぎりの最後の土壇場で，全力を振り絞って一挙に完成させる方式である。これは検査基準をクリ

---

35) A.H Simon／宮沢光一監訳 (1970)『人間行動のモデル』 同文館
McGregorは，経済人モデルに代わるX,Y理論の提唱者である。
Douglas McGregor／高橋達男訳 (1960)『企業の人間的側面』 産業能率短大出版部。
この研究成果をさらに発展させたマズローによる人間的成長と欲求の発展の5段階モデルとして
A. Maslow／小口忠彦訳 (1987)『人間性の心理学−モティベーションとパーソナリティ』 産業能率短大出版部
著者は，21世紀の社会において経済活動を超えたボランティア活動の重要性が増大し，パソコンを中心とするコミュニケーション手段の技術革新が，進展する中でNetworkman モデルに注目したいと思う。
金子郁容 (1986)『ネットワーキングへの招待』 中公新書

アすることに最大の目標を置いた仕事のやり方ではないだろうか。検査の形式的条件だけをミニマム満足するだけで，仕事もやりっ放しの傾向が強いのではないだろうか。担当者は無理な工程に疲労困憊してしまい，仕事の達成感も味わうことが出来ないのである。従って工夫改善を加える余裕もなく，また人間的成長も阻害されるのではないだろうか。

自然環境の影響を強く受けて予期せぬ事故も起る野外の土木工事の作業ばかりでなく頭脳労働においてもこうした傾向が存在する。例えば企画などの仕事も最初はなかなかエンジンがかからず納期の直前になって徹夜作業の連続で最後のつめを行うというスタイルになりがちなのである。

突貫工事スタイルは一種の成り行き管理である。このように関係者に緊張と無理を強いながら生産性の低いやり方ではなく，仕事の負荷を出来るだけ平均化して，なおかつ効率の高い仕事の進め方はいかにあるべきか？これは古くて新しい問題なのである。それにはまず目標を明確化し，仕事の全体像を把握することが必要である。次に構造化された仕事の作業群を時系列に落として日程計画を作成する。さらに各工程の担当責任者を決めて，進捗管理を行う。こうしたプロセスを確実にこなしていくノウハウとスキルが必要とされるのである。

研究（仕事）を管理する立場からすれば，非線形の仕事の進捗を出来るだけ線形にすることが，肝要でありGantt Chartによる工程管理は，これを前提にしているのである。

フィールドワークをベースとした研究では，特にボランティアの協力者の都合が大きく影響して，自分で予定した日程で事が進むとは限らないのである。特にKey-person に出会うまであきらめずに忍耐強く掘り進む作業が必要である。また期待していたデータが失われて存在しなかったり，非公開である場合には，研究は大きな壁に突き当たり前進を阻まれることになる。ハプニングで自分が初め予想していた情況とは，全く違った展開となることにも対応出来る柔軟さが必要なのである。

このように研究は，直線的には進まず，停滞と飛躍を伴う紆余曲折を経て，到達すべき収束点を求めて続けられるのである。研究者には不可欠な資質である探究心は，強い好奇心と情熱，長い模索期，準備期間を経て一定の成果を出すまで到達する忍耐力などによって構成されている。

マグロのような回遊魚はえさを求めて大海原をフルスピードで泳ぎ続けている。研究者もまたマグロのこのようにデータ，情報を求めて飽くなき活動を続けるのでなければならない。深海魚のアンコウが，提灯をつけてえさになるプランクトンが，近づいて来るのを待つような姿勢では，研究は成り立たないのである。

一般に問題の全体像を描くための調査データにも粗密が存在している。データが多様であり大きくばらつき，断片的である場合には，議論が表面的で拡散する傾向がある。これを収斂させるためには，量的に多くまた質の高いデータが分布する所に議論の主柱を立てるべきであろう。浅く断片的なデータでは本質論の展開は，無理がある。議論はあくまでもデータが語る所に集中させることが，基本である。データが語る所以上に前進しようとすれば推論が必要になり，論理が飛躍することを覚悟しなければならないのである。

次にデータ数が少ない場合には，自分が独自に発想した仮説によって中心的テーマに関するデータ群が，語る所を説明することになる。この時媒介項になるデータを，位置づけて出来るだけ論理の飛躍を小さくすることが肝要である。そのためには必要なデータを飛び石のようにつなげて論理の展開の基盤とするのである。ミッシング・リンクは，あくまでも事実とデータによって探究されなければならないのである。

研究がまとまるのは，リニアに進むのではなく，ある日突然ある考えを思い付いて急激に進捗するのである。1つのアイデアが生まれて来

るには，ちょうど結晶が出来るためにはビーカーに入れられた溶液が，一定の濃度と温度にまで達する事が必要であるのに似たようなプロセスを経るのではないだろうか。大きな結晶が出来るためには，最初の小さな結晶が生まれるきっかけになる刺激が，必要である。ガラス棒などが溶液に差し込まれるとその先端から一挙に結晶が，形成されのである。溶液濃度は，データの蓄積であり，溶液温度は，テーマへの思考の集中と解することが出来る。結晶が出来るきっかけとなるガラス棒は，ある場面における外部から与えられた刺激によって生まれたひらめきと読み変えてもいいであろう。

あるテーマに関するデータの蓄積は，単なる準備に過ぎない。しかし一つの仮説を持っていれば，このデータ群が，ある日突然“一つの物語”語り始めてくれるのを期待することが出来るのである。

権威ある先行研究をフォーローして翻訳，解説する文献研究には，自分の仮説はあまり必要とされないであろう。しかし20世紀末の激動する国際環境にあって企業経営も大転換を迫られており，文献研究だけでは，その変化のベクトルの方向とスピードを予測することは出来ない。その難問を解く鍵はあくまでも現実の企業活動の中にしか存在しないのである。研究を志す者は自ら直接現場に触れて注意深く観察して，この変化の方向を追跡しなければならない。これはリスクの多い道である。しかしこの試練に耐えることが出来ない者は，研究者としての道を選択すべきではないのである。

その結果は実施してみなければわからない研究への情熱，失敗のリスクを覚悟した初期投資がなければ，研究は前進しないのである。時間とエネルギーとオポチュニティ・コストを賭けて，どこまでやり抜く気構えがあるのか，これが研究者に問われているのである。偉大な成果を達成した先人たちは他人には見えない場で，一人忍耐強く努力を積み重ねていた事に思いを致さなければならない。

§6　最初の作品

学部レベルにおいて一定水準の卒業研究を完成させていることを，前提に議論を進めたいと思う。

大学院修士課程ではまず専攻領域の基礎理論の学習と先行研究のフォローアップがその第一歩である。その後に研究テーマに関する調査や実験によって得られたオリジナルデータを使って自分の考えを論文としてまとめることになる。研究を始めたばかりの身にとって偉大な先人が達成した研究業績は，高い山の峰のようにそびえ立ち，それに比較した時自分の試みは，実にちっぽけなものとしかに思われないのである。自らの未熟さを謙虚に自覚していることは大切なことである。他方努力の成果がどんなに小さくとも自分にとっては切実でかけがえのない試みであることに自信と誇りを持つ必要があるのではないか。“私は人類の歴史始まって以来の唯一の存在である。世界の権威もまた一つの存在である”と言う一種の青春の傲慢さこそ，新しい世代の特権であり，新しいものを創造していくドライビング・フォースではないか。

一般的にある人間の最初の作品には，後に展開されるテーマやアイデアや方法が全て，萌芽的に含まれていると言われている。もしこの経験原則が人生と仕事に対して妥当するものであるとすれば，大学院の学生には，最初の作品となる修士論文に全力投球で取り組む勇気と情熱が求められている。それぞれの専攻領域においては歴史と伝統の積み上げによって論文のスタイルが決められている。大学院という制度の中の研究ではスペースや提出期限など制約条件があるため，自分の考えたことを全て1つの論文の中に組み入れることは出来ないであろう。1つのテーマを探究する過程でその副産物として直接的，間接的に関連する多くのアイデアが生み出されるであろう。それらのアイデアは現在進行中の研究には直接関連性を持たないかもしれない。しかしこうして生みだされた貴重な副

産物であるアイデアや気が付いた点を，後の研究に生かすためにノートに漏らさず記録しておくよう心がけることがことが大切である

古来“処女作を凌駕することは難しい”と言われている。これは最初の作品に自分の全てを出し尽くして，その人の作品の原型が決まってしまうことを意味している。研究を進めても新しいアイデアが出てこないため新しい課題に挑戦をする勇気を失い，問題意識，テーマ，方法，研究対象などが限定されてしまうためである。その後の研究成果が最初の作品のバージョン・アップに過ぎなくなってしまうことを意味していると考えられる。

人にはそれぞれの信念体系と価値基準に従った生き方と研究のスタイルがある。大切なことは，自分が最初に抱いていた“知的好奇心”，“問題意識”，“イメージ”を狭い専門領域に限定したり，既成概念の中に埋没させることなく出来るだけ素直に育てて行くことではないだろうか。

第3節　鋭い観察と現場の記録

§1　先端的問題の発生する現場のフィールドワーク

アメリカ・カリフォルニア州フリーモントに立地するGMの組み立て工場は，1982年に採算が取れないために操業を停止した工場である。しかしこの工場は1984年にトヨタとGMの合弁企業であるNUMIIとして再発足して，最初の2年間で質，量ともに優れた業績を上げて全米から注目されるに至った[36]。フォードによって確立された大量生産システム（ベルトコンベヤーによる組み立て方式）は，アメリカから日本に導入され，それが今度は“トヨタ生産システム”としてアメリカに逆輸出されることになったのである。

こうした1980年代の日本企業のアメリカ本土における直接投資や合弁企業の設立・運営は，日本的システムである“リーン生産方式（lean production system）”の技術移転の可能性を検証する上において，絶好のフィールドを提供したのであった[37]。

戦後の経済復興から1960年代に始まる高度経

36) Mike Parker, Jane Slaughter “Choosing Sides”／戸塚秀夫監訳（1995）『米国自動車工場の変容－ストレスによる管理と労働組合』　緑風出版

37) F.W. テイラーの科学的管理法の思想と方法は，一大ソフトウエアである。ハードウエアは，Ford自動車(株)に実現されたメガマシン（ベルトコンベア・システム）である。アメリカから導入されたメガマシン（ベルトコンベア）を，操作する日本企業の職場集団は，原型であるアメリカの分業と協業の方式を修正したのである。その結晶が，もう一つのソフトウエアである「カンバン」である。作業者集団の働き方は，その国独自の勤労意欲や労働倫理と深く結びついている。原型を創出して，機械設備，管理，製品も世界のトップに立っていると自負していたアメリカのビッグ・スリーが，後進国で劣位にあった日本人のマシンの操作の仕方に驚いたのである。
アメリカ側からの研究として
Michael L. Dertouzos et al.／依田直也訳（1989）『Made in America』　草思社
Daniel Roos, James P. Womack and Daniel Jones ／沢田博訳（1990）『リーン生産システムが世界の自動車産業こうを変える』　経済界
Robert Perrucci(1994), *Japanese Auto Transplants in the Heratland-Cororatism and Community*, Aldine De Gruyer
Stanley D. Tooley & James G. Hettinger ／竹内秀夫訳（1998）『デンソーと小さな町バトルクリークの挑戦』　日本能率協会
日本側からのフォローアップ研究として
安保・板垣・上山・河村・公文（1991）『アメリカに生きる日本的生産システム』東洋経済新報社
東京海上火災・企業コンサルティング室（1992）『摩擦の中のアメリカ進出』　ジャパン・タイムス
藤本隆宏・キム.B. クラーク／田村明比古訳（1993）『製品開発力－日米欧自動車メーカー20社の詳細調査』　ダイヤモンド社

Tetsuo Abo Ed. (1994), *Hybrid Factory-The Japanese Production System in the United States*, Oxford University Press
石朋次・柏木宏（1994）『アメリカの中の日本企業』日本評論社
熊谷文枝（1996）『日本的生産システムインUSA』

済成長期にキャッチアップのために欧米先進諸国を懸命に学ぶばかりの学生時代を送った我々の世代には想像も出来ない世界が現実のものとなったのである。

鉄鋼業はリーディング・インダストリーとして戦後の経済復興と高度成長を牽引したのであった。その技術導入を基礎に推進された技術革新は，生産力の量的拡大と質的高度化を短期間の内に達成し，1950年代末に始まる発展途上国への技術移転においても先端的な役割を果たして，日本の企業の国際化を推進したのである[38]。その後の繊維，機械，電器，化学，自動車産業などの産業が発展途上国ばかりでなく欧米先進諸国への進出し直接投資による技術移転と文化摩擦問題は，推論を超えて，現実的な問題となったのである。日本国内で日本人により，日本人のための確立された『日本的経営』は今や世界のフィールドでその有効性と限界を試されているのである。

国際社会の変化のスピードに対応して企業のビジネス活動も，ダイナミックに進められている。このため研究者が“問題”として認識して研究を準備している段階で情況が，変化してしまう事も多いのである。ビジネスの実践主体の経営者や管理者は次々と起こってくる問題の解決に奮闘しており，長期的展望を得るのは困難である。だが外部から観察して全体の流れを把握しようとする研究者にとっても，変化のスピードは速くて生起している問題の全体構造の把握が出来ない内に，次の大きな変化が押し寄せてきて，状況が一変してしまうのである。

世界に展開する日本企業の研究を志す者は，その経営が展開される現場に飛び込みそこで起っている社会的事象を，一期一会の精神の下にあらゆる角度から正確に記録することから，スタートする必要がある。日本企業が，外国に進出した時に直面する問題は何か，そしてそれはどのようにして解決されたのか？またホスト国の中央政府，地方自治体，政党，個人，労働組合，関連業界，商工会議所，スポーツ・クラブ，ボランティア団体，コミュニティ団体，プレス，マスコミなどが，それぞれ進出した企業の経営を受けとめているのか？これを追跡するのである。その成果は，単に学術論文としてではなく異文化交流の一大叙事詩となるものである。

外国のフィールドにおける日本企業の研究は，日本が，先進国へのキャッチ・アップに追われていた時代の学生には望むべきもないテーマである。若い世代は歴史的に恵まれたチャンスをフルに活用して研究を進めることが，期待されているのである。

大学の図書館や研究室での企業の国際的ビジネスの文献研究は，必要条件に過ぎない。文献と既存のデータだけでは，現実に肉迫することが出来ず，具体的な問題解決に貢献しうる研究を達成出来ないのである。フィールド・ワークとオリジナル・データこそ独創的な研究の基本であることを忘れてはならない。

研究とは社会的現象の奥に潜む本質を見抜くことであるといえよう。そのためには，我々はまず問題とする事象そのものを直接見たり，触れたり，感じたり出来る現場まで移動しなければならない。

この移動には，「水平移動」と「垂直移動」の２つアプローチがある。

「水平移動」は，文献や既存のデータによって推論を進めて問題を観念的に把握するのではなく地理的空間的に移動して，問題が発現している現場に接近する方法である。社会科学的研究にとって既成概念を脱して，客観的，具体的に問題を考察しなければならない。そのためには自己対象化が，不可欠の契機となっている。自分の生まれ育った地域に生活するだけでは，

日本貿易振興会
Kazuo Koike (1998), NUMMI and Its Prototype Plant in Japan, *Journal of The International Economies* 12, p.40-74 1998

38) 米山喜久治（1978）『技術革新と職場管理』　木鐸社
同　　（1990）『適正技術の開発と移転－マレーシア鉄鋼業の創設』　文眞堂

その社会の歴史や文化（価値基準）を相対化することが困難であり，低俗な自民族中心主義（ethnocentrism）に陥る危険性が高いのである。これを防ぐにはには異文化に身を置くこと，外国のフィールド・ワークを行うことが，最も正統的なアプローチであろう[39]。

垂直移動は，社会的な立場の移動を意味しており，組織や村落に長期滞在する参与観察（Participatory Observation）や実際にそのインサイダーとなって働くアクション・リサーチ（Action Research）の方法がある。垂直移動とアクションリサーチによる研究の古典としては，フランスの哲学者シモーヌ・ヴェイユの『工場日誌』がある[40]。彼女は，1930年代実際に工場労働者となって働き，現代産業社会における“労働”の意味を，探究したのであった[41]。

日本におけるアクションリサーチの研究成果としてはジャーナリスト鎌田慧の『自動車絶望工場』をあげることが出来る[42]。鎌田は企業外部からの資料調査，インタビュー調査でなく，トヨタ自動車の組立工場の“臨時工”となって，実際に働いてその経験を，1冊の書物にまとめたのである。管理する立場からの思弁的な理論構築ではなく，管理される立場に身を置いた者の労働記録は，日本的経営を考察する場合の根本資料となっている。

§2　鋭い観察で兆候を把握する

戦後日本の経済復興に続く経済の高度成長期の学生と，21世紀に青春を生きる若い学生に与

39) 米山喜久治（1993）『探究学序説』　p.168　文眞堂
韓国からの留学生にとって韓国－日本，ソウル－東京，ソウル－大阪，ソウル－福岡，ソウル－札幌のように移動する軸と距離を変えることによって，見える風景が違ってくるのではないだろうか。
自国のソウルでの日本企業の文献研究は，極めて限定的な認識しか得られないであろう。
首都を結ぶソウル－東京という軸と移動距離を設定することは，外交政策，通商政策等のマクロ的研究には，有効であろう。しかし日本の地方への視点を欠落すれば，地方の中小企業の活動を見落とすことになるであろう。さらには韓国との歴史的関連性の深い関西や九州以外の北海道への軸と移動距離はユニークな視点を与えてくれるのではないか。北海道開拓と朝鮮の植民地化とは密接に関連しているのである。“留学先の大学が立地する地域性”を生かすことが，新しい研究の問題意識を醸成してくれるものと考えられる。

40) シモーヌ・ヴェイユ／田辺保訳（1972）『工場日記』講談社文庫
シモーヌ・ヴェイユ／ 黒木義典・田辺保訳（1968）『労働と人生についての省察』　勁草書房

41) 大木健（1998）『シモーヌ・ヴェイユの生涯』（新装版）　勁草書房

42) 鎌田慧（1973）『自動車絶望工場－ある季節工の日記』　現代史出版会，講談社文庫版　1983
Satoshi Kamata with an introduction by Ronald Dore (1982), “Japan in the Passing lane－An insider's account of Life in a Japanese Auto Factory” Pantheon Books, New York
Dore は，この翻訳本の序文を書くことについて，日本のトヨタ自動車の社員が，暗黙の圧力をかけたことを指摘している。 Introduction by Ronald Dore
フランス人労働司祭アンドレ氏の東京のドヤ街に住み着いて自ら住民となって人々の生活を観察し，記録したものは，日本人と日本社会研究の白眉である
Andre／花田昌宣・斉藤悦則訳（1994）『出る杭はうたれる－フランス人労働司祭の日本人論』岩波書店
大学院生には“若さ”の特権がある。それは学生という身分の不安定性が，現場に働いて生きる人々との微妙な，感情交流を一瞬可能にしてくれることである。人々は，真摯に接してくる者に，本当の姿を教える寛容さを持っているのである。
“大学教授”などという職業は，社会的権威＝権力を，意味しており，現場の観察とヒヤリングには，障害となっている。大学教授なる者が，現場に働き，生きる人々を，単なる観察の対象として接することへの反応である。人々は，あたりさわりのない模範回答をして自らの身を守るのである。
日本の鉄鋼企業の生産工場の職場経験を，まとめたものとして
中村章（1982）『工場に生きる人びと－内側から描かれた労働者の実像』　学陽書房
日本企業の途上国との合弁企業の設立と技術移転のプロセスを，当事者が，まとめたものとして
大岩泰（1985）『マラヤワタ製鉄建設日誌』 新潮社
同　　（1986）『海外技術協力の現場から－アンタム・ポマラ・フェロニッケル製錬所建設譜』 文眞堂

えられる課題は，その歴史的環境の変化によって大きく異なっている。従ってその問題解決に必要とされる理念，方法，具体策もまた変化せざるを得ないのである。

20世紀に開発，構築された技術，社会システム（大量採取，大量運搬，大量生産，大量流通，大量消費，大量廃棄）は，経済活動によって先進工業国を中心に“豊かな社会”を実現したが，自然の回復能力を遥に超えた産業活動と生活は地球環境に深刻な打撃を与えるに至ったのである。飢えと貧困を克服するための経済活動が，新しい解決困難な問題を作り出したのである。

高度成長時代を実現した進歩史観の一大イベントは「人類の進歩と調和」をテーマとする1970年の大阪万国博覧会である[43]。だがこの直後から日本各地に公害が激発し，73年のオイルショックは，地球の持つ無限の復元可能性を暗黙の前提にした現代の生産と消費と廃棄のシステムを根底から問い直したのであった。

21世紀の人類史の大きな転換期に生きる若い学生諸君は，この時代の本質的課題を見つめなければならないのである。

日本の企業における経営管理に焦点を絞れば，敗戦後の不要論を克服して復興，成長した日本の自動車産業は，排ガス規制をクリアした優れた燃費のエンジンを搭載した小型車によってアメリカ市場への進出に成功したのであった。低コスト，高品質の小型車に代表される工業製品を生産しうる日本的経営が，その三種の神器として「終身雇用」，「年功賃金」，「企業別組合」を持つものとして注目されたのである。国際競争力を失ったアメリカ製造業は，J. アベグレンに始まる通俗的な人事・労務管理の日本的特質論による説明に満足しなかったのである[44]。

産業界と学会が共同でMITに日本研究プロジェクトロを組織し，高い生産性を実現するシステムとしてトヨタ自動車の管理システムであるカンバン方式，JIT（Just in Time）を発見したのであった。市場規模が小さく1つの生産ラインで多様な製品を生産しなければならなかったトヨタ自動車は，コストの上昇の原因となる部品の在庫管理に苦しみ，この克服の方法としてジャスト・インタイムの生産管理システム（JIT）を開発したのであった[45]。

アメリカから導入されたF.W. テーラーの科学的管理法をベースに日本的な工夫改善が融合された開発されたカンバン方式は，1980年代後半科学的管理法の母国アメリカに逆輸入されて企業の活性化に大きなインパクトを与えたのであった。新しい管理システム構築の基本概念（concept）は，ビジネス・プロセス・リエンジニアリング（Business Process Reengineering）であり，市場からの情報発信をキャッチし開始される企業の財,サービス及び情報の生産，流通，販売のプロセスを根本的に再設計して一切の無駄を排除して効率化を図ろうとするものである[46]。

トヨタ自動車にオリジンを持つカンバン方式（JIT）は，リーン・システムと名前を変えて，アメリカ生まれの高度な情報技術（IT）と結合

43) 日本の近代国家建設と産業化は，「坂の上の雲」を望むものであり，「進歩」への全幅の信頼を置くものであった。1970年の万博は，その頂点に立つものであったといえよう。
日本の進歩をリードした福沢諭吉のアメリカのフランクリンとの対比については
平井祐弘（1990）『進歩がまだ希望であった頃－フランクリンと福沢諭吉』　講談社学術文庫

44) J. Abegglen／占部都美訳（1958）『日本の経営』　ダイヤモンド社
E.F. Vogel／広中 和歌子・木本彰子 訳（1979）『ジャパン・アズ・ナンバー・ワン』　TBSブリタニカ

45) 大野耐一（1973）『トヨタ生産方式－脱規模の経営をめざして－』　ダイヤモンド社
門田弘安（1983）『トヨタシステム－トヨタ生産管理システム』　講談社文庫

46) BPEは，アダム・スミス以来の分業と協業による企業の組織と管理システムを情報の流れを把握することによって，再編成しようとするものである。
M.Hammer & J. Champy／野中郁次郎監訳（1993）『リエンジニアリング革命』　日本経済新聞社

されて新しい管理システム（Supply Chain Management）が，開発されたのである。無駄を極限まで少なくするリーン・システムは，在庫ミニマムによって高収益の企業経営の実現に成功したのであった。競争の厳しいアメリカのパソコン業界では，顧客の希望する仕様の商品を宅配する管理システムが，実現された。この管理システムは，再び輸入されて日本国内でも外資系企業に導入されたのである。規格品の大量生産と販売を中心とした日本のパソコン・メーカーの経営方式に一石を投じたのである。例えば“日本ゲートウエイ2000 直販システム”は，日本のメーカーに衝撃波を与えて，日本企業はこれに対抗すべく同様のシステム構築を急がざるを得なかったのである[47]。

トヨタ自動車の系列部品メーカーとの緊密な連携を実現したシステム（デザイン・イン）はアメリカの自動車産業に移転された後にハイテク産業にも波及効果を与えのであった。また日本に逆輸入されて自動車産業も顧客ニーズを直接車の仕様に反映させる販売・生産（マーケット・イン）システムの構築を追求することになったのである[48]。

日本の優秀な現場作業者の工夫改善によって構築され，日本的経営の神髄であり移転不可能とさえ考えられたJITも，1980年代にアメリカに導入されたのであった。JITは，その後アメリカの自由な市場経済と産業活動を基盤に発展した情報システムと結合しアメリカン・システムとして生まれ変わったのであった。生産技術がハード技術であるとすれば，ソフト技術である管理システムも国際的な移転と伝播さらには，相互学習によってその国の固有の社会文化的背景の下に独自のスタイルとして発展するのである[49]。

若い研究者は，過去の日本的経営の幻想に囚われることなく，世界の産業の現場で実践されている新しい動向を凝視する必要があるだろう。

---

47) 日本ゲートウエイ2000株式会社　パンフレット（1997年9月）
1985年22歳のテッド・ウエイトが友人と2人で設立。祖父の牧場の片隅にオッフィスを構え，祖母の定期預金だけを資本にパソコンの通信販売をスタート。1996年，これまでの出荷台数1,900万台を突破。年間売上高は，前年比37%増の50億4000万ドルに達した。また成長著しいアジア・太平洋地域での売り上げは，2億3000万ドルを超えた。社員数は約9000名。
Gateway 2000のカンパニー・スローガンは“You've got a friend in the business”である。
日本のハイテク企業ＮＥＣとアメリカのハイテク企業Packerd Bell社の合弁企業であるPackerd Bell NEC Japanは，パソコンの通信販売システムとして“カスタマイズ・ダイレクト・システム”を構築して，新しい方式の販売を開始した。
同社パンフレット　1998 Summer
日本の時計メーカーであるセイコーとEPSONの合弁企業である，「セイコーエプソン株式会社」は，パソコンの“カスタム・メイド・サービス”によりパソコンの通信販売を行っている。
これらは全て店頭の既成の製品ではなく基本的機能（スペック）を持ったマシンを顧客のニーズに応えて生産し，販売するものであり，ハイテク商品が，洋服のイージーオーダー・システムに近くなっていることに注目すべきであろう。

48) 「かんばん方式－トヨタ，電子化に着手－瞬時に発注，部品生産効率化」　日本経済新聞　1998年10月1日号　記事

49) 自動車生産のシステムについては，その原型はFord自動車が，開発したコンベアによる組み立て生産を行うFord systemである。アメリカに遅れて自動車生産を始めたSwedenのVOLVO社は，グループによる組み立て生産方式を開発した。一方同じくアメリカから導入したコンベア・システムを日本の現場の職場集団が，工夫改善を加えて構築したカンバン・システムがある。現在この生産システムが，相互に浸透しながらそれぞれの国情にあったシステムを模索している。
SwedenのVOLVOシステムは，スウェーデン人の工場内労働を単に賃金を得るための“犠牲”として位置づけることに甘んじない“したたかさ”と“コミュニティ感覚”が，基本になっているのではないか。
Christian Berggen／丸山恵也・黒川文子訳(1997)『ボルボの経験－リーン生産方式へのオルタナティブ』　中央経済社
日産自動車のイギリス（Sunderland）への直接投資による工場建設と操業の問題については，
Philip Garraham & Paul Stwert (1992) “The Nissan Enigma- Flexibility at Work in a Local Economy”, Masell Publishing
トヨタ生産方式に代表される日本的システムの西欧

世界の難問である「環境問題」を視野に入れながら高度産業社会が転換すべき方向を探索しなければならないのである。

§3　現場の記録を作る習慣形成

明治以来日本の学校教育は，生徒に標準的知識を出来るだけ正確に記憶させることを主眼としてきた。このため“作文”の時間以外自分の感じたり，考えたことを記録し，発表する訓練はほとんどないといえよう。近年受験体制が小学校まで浸透するに至り，教科書に掲載された出題頻度の高い問題への模範回答を反復練習によって暗記させる傾向を強めてきたのである。こうして高校生は“観察記録”を作成したり自分の考えを表現する経験を持たないまま大学に入学してしまうのである。

さらには大学時代もにレポート作成の機会は少なく，この弱点を克服しえないままに卒業し，実業界や大学院に進学する学生が圧倒的に多いのではないか。“記録を取る”習慣を身に付けていない人は，ビジネスや研究の活動が必要とする基本的スキルを修得していないのである。このためビジネス界ではマニュアル労働以外には適応能力を持たず，知的生産を中心とする研究は，単独で推進できないことを意味している。『知的生産の技術』の著者である人類学者梅棹忠夫は，中学時代以来“発見の手帳”を使い始め60年間以上も盛んな知的探検活動を続けている。我々はこうした優れた先達の経験と方法に学びながら自らの課題の達成に挑戦しなければないのである。

1969年の『知的生産の技術』の出版以来既に30年を経過しているが，こうした方法やスキルに対する関心の社会的普及と定着は，必ずしも進んでいないように思われる。手帳に鉛筆で記録をするという最も素朴で基本的な方法は，最近のパソコンブームの中でその重要性が，忘れられているのではないだろうか。

自分の将来の生活にかかわる切実な問題である就職活動においてもこうした傾向が，強いことが報告されている。企業説明会に出席する学生達が，記録用の手帳やノートを持たず説明内容の要点をメモすることもしないのである。大学の大教室での講義においては受講学生の行動については，教員の目が行き届かない事が，通常である。しかし小人数教育を行う，ゼミや演習の場においてもこうしたスキルの重要性について教員から指摘も指導も受けることがなかったとすれば，学生時代を無駄づかいしていると云っても過言ではないだろう。

現代社会が抱える諸問題はますます深刻化しており，変化のスピードも速く，相互に関連しており，それだけを独立した問題として解くことが困難になっている。もちろんのことであるが当事者には問題解決への即応性を求められているのである。こうして問題を発見して，提起する研究者にも正確な全体像の把握が，求められており，それだけ現場における正確な記録が不可欠なのである。

若い世代にとっては，古い世代の怠慢によってこの地球上に積み残された諸問題を，解決するための自由度と時間的余裕は狭まっていると言わなければならない。羅針盤と推進力を失ったあたかも難破しつつある船に乗り組んだようなものである。決定的な座礁を避けて航行する努力を続けながら，緊急避難が可能な島を発見出来れば，救命ボートに乗って脱出を計らなければならない。従来のパラダイムを難破しつつある船舶にたとえるならば，積み込まれているさまざまな道具類は，学問研究の方法論であるといえよう。少しでも役に立ちそうな道具を，

への移転可能性についての検討は，フランスのレギュラシオン学派によって行われている。
Benjamin Coriat／花田昌宣・斉藤悦則訳（1992）『逆転の思考－日本企業の労働と組織』藤原書店
従来の産業及び企業の管理システムの最先端モデルへの収斂仮説と発散仮説の議論は，まだ進行中であり，一定の結論に達していない。
Clark Kerr／嘉治元郎監訳（1994）『産業社会のゆくえ：収斂か拡散か』　東京大学出版会

難破船から持ちだして将来に備えなければならないのである。

その場合最も基本的で重要なのが自分の手で考え記録するための“ノート”と“鉛筆”である。またこれを使いこなすスキルである。日頃修練の積み重ねが，自らを助けるのである。

§4　外国語によるその場の記録

1985年に日本鉄鋼業の技術移転（Technology Transfer）をテーマにしてMalaysiaで実施したフィールドワークが私にとって外国における本格的な経験である。この経験を基にして方法論について検討してみたい。

まず日本語で素早く記録を残す技術の修得が前提となる。外国では言葉の壁が，これに加わることになる。外国語による現場の記録，メモの作成にはかなりの熟練が必要とされる。日本語－英語－地域語の2段階の通訳を通したインタビューなどは，聞き違いや語彙の不十分さによって誤解が発生する確率が高いのである。外国のフィールドワークではなく留学をした場合も，学生としてまず直面するのがこの外国語による講義の記録，メモ（Note-taking）であると言われる。普通の語学力を持つ者には外国語を聞きながら日本語に翻訳して記録を取ることは不可能である。バイリンガルの能力を持つプロの通訳者でも外国語で語られたことをそのまま外国語で記録（メモ）を残して，これをベースに通訳を行うことが報告されている。

外国語による講演やインタビューの記録を取るためには，母国語である日本語の場合と同じようにキーワードを正確に記録する能力を身に付ける必要がある。適切なキーワードの記録が取れれば，これをベースに語られた内容の要点を，復元することが可能である。インフォーマント（情報提供者）の同意を得なければならないが，テープレコーダーが利用出来ればより一層正確な記録を残すことが出来る。

文化人類学者の西岡京治氏によれば外国語の熟達のレベル指標として，まず当該の外国語で夢を見ること，そして最終的その外国語で暗算が出来るレベルになると完全にその外国語をマスターしたということである。数学の論理体系－母国語－外国語の3つの言語システムの間を自由自在に動き回れるのは，素晴らしい頭脳の働きである。

日本人にとっては学校における外国語教育が，英語中心であるため，外国語と云えば英語をまず意味している。受験で苦しんだため英語に対してアレルギーになった人も多いであろう。しかし異文化コミュニケーションの時代を迎えて我々は，英語を改めてコミュニケーションのツールとして習得しなければならないのである。

コミュニケーションの根本は，相手とその世界を理解しようとする知的好奇心である。自分が相手に伝えたい内容があって，それを包む風呂敷の役割を果たすのが，何とか使えそうなただ一つの外国語としての英語である。

日本国内にあって日本語で他人と話すことに興味を持てない人が，不自由な外国語を使って外国人と話すことに積極的になれるとは考え難いのである。外国語によるコミュニケーションを問題にする以前にまず他人と気軽に話す態度とスキルを，身に付けなければならないのである[50]。

京都大学理学部の河合雅雄教授は，大学院の学生を預かった時には，その学生にアフリカなどの外国のフィールドワークに行くことを課題

50) 若い世代の自閉症傾向は，他人とのコミュニケーションが不可能な人々を生んでいる。
中島梓（1991）『コミュニケーション不全症候群』筑摩書房
三森創（1998）『プログラム駆動症候群－心が持てない若者たち』　新曜社
塩倉裕（1999）『引きこもる若者たち』　ビレッジ・センター
町野静夫（1999）『成熟出来ない若者たち』　講談社文庫
「滅私奉公型の旧世代においては，ハイテク時代の変化についていくために，ますます失感情症に陥る危険が強まり，心身症になる人が増加している。一方若者たちも旧世代との縦の関係をなかなかもつこ

として与えている。学生は，健康管理から始まり，現地の食事を取り，限られた予算で生活をしなければならない。さらには中心となる研究課題のためのフィールドワークを行わなければならない。一種のサバイバルゲームの中から，学生は，現地の言葉（外国語）をマスターし，研究者に必要とされる基本を自分なりに身に付けることが出来るのである[51]。

途上国問題の研究ためには，文献研究はあくまでも準備的な意味を持つに過ぎず，自ら発展途上国に直接出かけて行って人々の生活に直接触れることから始めなければならない[52]。文献ばかり読んで途上国の貧困，失業，環境，産業開発，権力の腐敗などの諸問題を不正確な統計資料で推論するだけでは，起っている 問題のリアルな像を把握することは出来ないのである。留学して学生たちと生活と勉学を共にし，その国の将来のエリート達が，どんな人生の夢を持ち，母国のどのような発展を望んでいるのかを，人間的な交流をベースにして学ぶ必要があるだろう。さらには問題の起っている現場に自ら立ってみなければならない。まず身を切られるような現場体験が，あってそこから説得的な論理と理論の構築が可能なのではないだろうか。

若い頃に青春の命を懸けた経験（研究の初期投資）がなければ，既に多くの研究が蓄積された領域では，従来の水準を凌駕する研究成果を出すことは困難なのである。

現場で人々の生活ぶりに直接触れて産業政策の具体的な実施過程をフォローするのでなければ，当該政府の産業開発政策や日本からのODAの有効性を，評価することは出来ないのである。権力者につながる人々は，自らと所属する集団の利益を守るため，政府の政策に賛成を表明している。しかしそこに暮らしている一般民衆の評価とは別であることを知らなければならない。

現地での観察とインタビューなどのフィールドワークによる正確な記録が，全ての出発点である。

第5節　情報探検の基礎

§1　情報の信頼度

日本の新聞，雑誌には出所の明らかでない情報（データ）に基づく記事を，多く見つけることが出来る。新聞，雑誌記事を社会科学的研究の資料として活用したい研究者の対場からすれば，立論の根拠となるデータが明示されなければ，それは単なる意見（opinion）に過ぎないのである。論稿や記事を書く記者に事実（データ）と意見の違いが明確に意識されれていないことが，根本原因である。5W1Hの明確でない文章を記事として掲載して平気であるのは，ジャーナリスト精神の頽廃であると言わなければならない。

1つのデータからは幾通りもの意味を引きだすことが可能であり，分析と解釈が可能となる。

とができないまま，狭い仲間意識にもとづく表面的な横の関係をのみかたくなに守り，自分の殻に閉じこもっている者も少なくない。」
熊井三治・藤井真一（1993）『失感情症の時代を生きる』 p.57～58 朝日新聞社

51) 河合雅雄「僕は体が弱かったし，戦中戦後の大変な時代を過ごして，二十歳代の大切さというのを痛いほどよく知っていたので，二十歳代に，その人が全力発揮できる場所だけ与えてあげようと，これだけ。そのためにはアフリカに放り込むことです。そこに一人でいることなんです。そうすると，生きていくためには現地の言葉を必死になって覚えなくてはいけないし，学問的な成果も上げなくてはならないし，とにかく自分が持っているものを全部出しつくすでしょう。帰ってきたら，ものすごく成長していますよ。」
「特集座談会：ライバルはダーウィン－自然科学から自然学へ」川喜田二郎・河合雅雄・荒俣宏『アニマ：Anima』 p.17 1992.10. No.241

52) フィリピンのスラムに住み着いて行ったフィールドワークによる優れた第三セクターの研究として
中西徹（1991）『スラムの経済学』 東京大学出版会
研究の方法論に関する詳しい検討については
佐藤誠編（1996）『地域研究調査法を学ぶために』 世界思想社

問題はデータの提示がないままにその分析と解釈だけが，独立して伝えられることである。さらに不都合なのは斯界の権威（例えば東京大学教授）が行った分析と解釈が，あたかも唯一の正しい分析と解釈であるごとくマスコミによって喧伝されることである。戦後の公害の歴史に照らしてもこうした事が問題のリアルな実像の把握を妨げ，徒に問題解決を遅らせることになったのである[53]。権威ある学者や専門家の発言内容も，あくまでも1つの“意見”に過ぎないことを忘れてはならないのである。

ある問題に関する具体的なデータが提示されてこそそれを基礎にした分析，評価の結果としての“意見”が意味を持つのである。事実（データ）とその分析と解釈及び意見はセットで提示されなければならないのである[54]。研究を志す若い諸君は，立論の根拠を示さない意見に振り回されてはならないのである。事実（データ）と意見を混同するようではその人の知性が疑われるのであり，社会を澄んだ目と共感を持って観察すべき社会科学研究者としては決定的な能力不足なのである。

文献研究おいても，データの出所を明示しない文章や議論を安易に引用してはならないのである。

最近のパソコンとそのネットワークの発展によって情報収集活動はまずインターネットいうイメージが普及している。現代の情報洪水時代にあって情報収集のためのアンテナが，問題意識であり，センスであるあることが忘れられているのではないだろうか。インターネットはあくまでもツールに過ぎないのである。

ではどうすれば問題意識や情報センスを磨くことが出来るのであろうか？モノ作りの現場における優れた熟練工の養成についてはこれまで繰り返し議論され，その方策が検討され実施されてきたのである。しかし情報化，サービス化の時代を迎えてサービスと情報を担う中核的な人材の教育訓練プログラムは，未だ不十分ではないだろうか。特に“情報センス”を磨くための教育訓練プログラムの開発は，緊急の課題であると言わなければならない。

“情報管理”のような抽象的な表現では，現代日本企業が抱えている問題の本質に接近出来ないのではないだろうか[55]。たとえば「社員のコピー感覚と仕事の進め方」というように具体的な人間の情報行動に焦点を合わせると，問題解決の効果的な探索が可能となるのではないだろうか。

組織研究には大量の量的データが，絶対不可欠という訳ではない。量的データは，構成要素の相対的な比重を明らかにするために必要とされるのである[56]。組織研究には質的アプローチが必要であり，品質の高い質的データの適切な構造化が，組織問題の本質の解明を可能にしてくれるのである。

---

53) 化学研究者清浦雷作（東京工大教授）は，水俣病の原因について不十分な現場調査に基づく思い込みによる仮説（有機アミン説）を主張して，実験を続けた。その結果水俣病の原因解明を遅らせたのであった。これは現場調査を行わない実験科学的アプローチの失敗を明示するものである。日本のマスコミは，彼の化学者としての権威を活用して大々的にこのアミン説を報道したのであった。しかし有機水銀が真の原因であることが，判明した後も現場から遊離した報道に対する反省を明らかにしていない。

54) 科学的データの4条件として，時（date），所（place），出所(source)，記録者（recorder）
川喜田二郎（1967）『発想法』　p.48　中公新書

55) 情報関係の学会では，『情報管理』と題する研究論文が多く発表されているが，道具としてのコンピューターの方から組織や人間を考察する傾向が強いのではないか。経営官僚制度の中に組み込まれた日本人の思考と行動様式を，把握するのでなければ，ツールとしてのコンピューターも十分に使いこなせないのである。《問題－方法(ツール)－人間》の立体的な相互関連性が重要である。

56) 質的研究“Qualitative Research Method”については，
Anselm Strauss & Juliet Corbin (1990), *Basics of Qualitative Research*, SAGE Publications, Inc.

あるテーマに関連しているような情報を，「関係がある」として収集するのであろうか。この行動を決定するものが，鋭い感性と豊かなイメージに支えられた情報センスなのである。高性能コンピュータを駆使して，高速度での情報検索（retrieval），情報の整理，分類，ファイリングを，行ったとしても，基本となるインプット情報の質が悪ければ，正しい結論を導きだすことは，出来ないのである。質の悪い情報は，その程度に応じて取扱い，正確な情報を獲得するためのステップとして位置づければいいのである。このような情報を使うスキルが知的生産の技術，概念的スキル（Conceptual Skill）の重要な要素であるといえよう。

我々は検索された情報をランダムに並べているだけでなく，データの相互関係性の中に新しい意味を発見して行かなければならない[57]。

そのためにはデータの構造図，見取り図，マップ（Map）を作る手作業によって１つ１つ点検しながら検討を続けなければならない。こうしたテーマの設定，問題提起から情報探検，情報の構造化に至るプロセスが，思考(Thinking)ということではないだろうか。

そもそも芸術作品は，豊かなイメージに導かれて確かな腕によって良質の素材を生かし切った所に生みだされるものである。知的生産にとっては良質のデータこそ豊かでしなやかな思考を生み出してくれる源である。さらに良質な素材を生かして作品にまで仕上げるには，高度なスキル（熟練）が不可欠でる。このスキル（方法論）の修得には高い志を持って長い研鑽に耐えるのでなければならない。

研究者は忍耐強くテーマに集中して，人々の評価に値する作品を作り出すことに努めなければならないのである。

最近コンピュータ・メーカーのTVコマーシャルや宣伝用のマスコミ情報で，小型高性能の情報機器を持って走り回るビジネスマンのイメージが，全国に広く行き渡っている。携帯電話とリンクさせた携帯パソコンを使い，会社の本社から自由にデータを引っ張り出したり，逆に報告すべき情報を送信したりことは，ビジネスの現場では，今後ますます必須となるであろう。これをてきぱきとやってのけるビジネスマンはかっこいい存在となるであろう。しかし大学にあって研究者を志す若い人々は，このようなイメージに引きずられてはいけないのである。情報インプットと情報処理よりも思索するステップの重要性を認識して，ここにこそ自らの存在を賭けなければならないのである。そのため若い時代に情報センスと思索力を磨くための研鑽を積むことが必要とされている。

§２　キーデータ（Key Data）

ある事象の最も基本的で本質を示しているデータを，キーデータ（Key Data）と呼んでみたい。長い準備期間を経た調査の過程での偶然に出会いによって与えられる場合が多い。一般に調査は，直線的に進むものではなく，一見何の成果も得ることが出来ない無駄と思われるようなプロセスを経て，ジグザグに進むものである。戦後の公害研究史における化学者宇井純が偶然発見したチッソ水俣工場の水銀中毒実験データは，この典型的なケースであろう[58]。

私の経験した研究プロジェクトである『鉄鋼技術の移転に関する研究』においても小型木炭高炉の適正技術の開発者であり鉱山・冶金技術

57) Data Mining とは，人間がその経験に基づき直観的に相互関連の意味を発見するプロセスを，コンピュータの情報処理によって発見しようとするものである。

58) 宇井純（1971)『公害原論』　Ⅰ巻　p.125～129
「細川博士の展望なきたたかい」　亜紀書房
水俣病の原因解明に至る過程ではチッソ水俣工場付属病院長の細川博士が，キーパーソンである。同博士の実験による1959年10月の工場排水で猫400号が狂う実験データが，キーデータである。
同上　（1979)『キミよ歩いて考えろ』　p.108～116
ポプラ社
原田正純（1972)『水俣病』　岩波新書
同上　（1995)『この道は』　熊本日々新聞社
同上　（1995)『裁かれるのは誰か』　世織書房

者である大岩泰氏との出会いによって与えられた『Malayawata製鉄計画に於ける木炭計画の推進について』は，キーデータである[59]。私はこのキーデータによって初めてマレーシアにおける東南アジア最初銑鋼一貫製鉄所の建設によるは，適正技術の開発と移転の全貌を理解することが出来たのであった。

1960年代の末から1970年代の初頭にかけて「技術革新と職場管理」をテーマとして工場調査を実施した。研究仮説としては「日本の生産工場における職場序列は，定期採用者の技能を基軸とする。技術革新はこの技能序列を揺るがしてそこには新しい管理序列が構築される」を，発想したのである。しかしこれは企業現場の具体的なデータによって検証されなければ，ある若い研究者の１つの思いつきに過ぎないのである[60]。

管理のシステムは，企業内外の経営環境（市場，技術，原料，労働力など）の変化に従い，ダイナミックに変化している。現在進行中の「技術革新」については把握出来ても時系列的な分析が，なければ「技術革新の職場管理に与えたインパクト」を具体的に検証することは出来ない。この研究仮説を日本企業の生産現場のレベルで検証するためには，伝統的な出来るだけ古い時代の技術革新導入以前の原型を確定しなければならない。

生産現場レベルの職場の従業員配置は，各生産工程の担当係長の意思決定によるものである。新規採用の従業員の配置，従業員の職務遂行能力の向上，病欠などの理由によって年度毎はもちろん半年ごとに編成換えが行われる場合も多い。このため職場レベルの管理資料は，担当係長の交代に伴い次期の担当係長に必要なものが最小限伝えられるのである。そしてその役目を終えた管理資料はその時点で全て廃棄されることになる。

企業の経営管理における職場管理に関して，従業員管理の意思決定を行い実施する担当者は，キーパーソン（Key Person）である。企業組織は生き物であり，担当者はジョブ・ローテーション，配置転換，昇進，退職となって同じポジションに留まることはない。10年，20年と時間が経過して行く中で細かな日常の経営管理資料は，廃棄され，失われてしまい過去の事実を解明することが困難となってしまうのである。

日本企業の生産工場は，太平洋戦争中の米軍による爆撃や艦砲射撃によって工場を破壊されたため戦前，戦争中の資料は，もちろん残されていない。また敗戦後の混乱期の昭和20年代初頭の職場の管理資料も会社の資料室には残されていないである。

そこでたとえ資料が失われていても当時その職場で働いた経験のある人から経験談を直接聞かしてもらうことが出来れば，それ歴史的な証言として意味を持つことになる。失われた歴史的空白を埋めるべき情報を提供してくれる人を，求めて探検が続けられたのである。会社の退職者名簿の中から存命の人を探しだして，その人に面会して，直接話を聞く機会を得ることが出来るまでは，まさにジグザグのコースを辿ったのであった。もしうまく出会うことが出来れば，その人こそまさにキーパーソンと云うべき人物なのである。

私は東北岩手県の雪深い山あいの村を訪ねてそこに住んでおられた増田清衛門氏に出会うことが出来たのであった。同氏は戦前からこのB製鉄所製鋼工場平炉職場に勤めて現場の監督職（組長）を経験し，数々の発明工夫を成し遂げて現場担当者としての最高職位である「工師」にまで昇進した人であった。彼は自らの職場生活の貴重な記録として，自らが組長を務めた製鋼工場平炉炉前の昭和23年当時の職場編成の名

59) 米山喜久治（1990）『適正技術の開発と移転ーマレーシア鉄鋼業の創設』　文眞堂
大岩泰（1985）『マラヤワタ製鉄建設日誌』新潮社
同　（1981）「マラヤ木炭銑事始」『鉄鋼界』（1981年７月号）

60) 米山喜久治（1978）『技術革新と職場管理』　p.122～126　木鐸社

第３－１表：Ｂ製鉄所　50ｔ平炉　炉前班　従業員配置（昭和23年７月現在）

職分・職場序列	氏　名	年　齢	勤続年数	現工場経験年数	平炉作業経験年数	学　歴	基本給（円）
工　師	M. S.	51	33	33	33	小	3,190円（月給）
組　長	W. T.	48	23	23	23	小	88円65銭（月給）
伍　長	Y. K.	34	15	15	15	高　小	77. 38（〃）
炉前工１	S. K.	41	14	14	14	高　小	74. 80（〃）
炉前工２	H. K.	38	9	9	9	高　小	69. 38（〃）
炉前工３	K. K.	31	10	10	10	小	68. 68（〃）
炉前工４	S. S.	26	6	6	6	高　小	68. 95（〃）
炉前工５	S. T.	19	1	1	1	高　小	41. 75（〃）

［出所］米山喜久治（1978）『技術革新と職場管理』　p.124

簿を自宅に保存されていたのであった。私はノートにこの名簿をノートに写し取って，翌日心勇んで会社に出向いたのであった。この名簿に従い会社に保存されている労働者台帳によって１人１人のバックグラウンドを明らかにして職場編成を復元したのが，第３－１表である。これによって技術革新以前の従業員配置の原則即ち職場序列が，技能に基づいて行われていることを明らかにすることが出来たのである。

Ｂ製鉄所50ｔ平炉　炉前班従業員配置（昭和23年７月現在）のオリジナルデータは，会社の資料室には，全く保存されていない種類の資料である。キーパーソンの保存していた古い資料によって復元した職場編成表が，問題を解く鍵となったのである。

このようにフィールドワークには偶然とも云うべき人との出会いがあり，これが幸運にも研究を一挙に前進させてくれるのである。うろうろと歩き回る過程を経て”犬も歩けば棒にあたる”の例えのような出会いがきっかけとなって研究を前進させることが出来るのである。しかしそのためには忍耐強い準備と失敗を恐れない精神が必要である。

§３　文献の初版出版年

日本の代表的な出版社の出版目録（文庫，新書）には，書物の初版の出版年が，記載されていない。日本の出版社は，初版の出版年という情報が，読者にとっては意味がないと判断しているのであろう[61]。翻訳出版の場合には外国のオリジナルが，いつ出版され，日本語の翻訳がいつ出版されたのかは，重要な情報である。ベストセラーについても一時期本屋の店頭を賑わすが，それが過ぎると忘れられてしまうのである。後から振り返るとそれがいつごろの事か，判然としないのである。出版年を正確に知り議論の経緯を追跡しようとする者には，こうした出版目録は役に立たないのである。

一方ダイヤモンド社の図書目録(1997part 2)には図書の初版の出版年が，記載されている。また文眞堂や大学出版部の代表格の東京大学出版会の出版目録にも出版年が記載されている[62]。

日本の出版社が自らの出版物の“出版年”に対してなぜ感度が低いのか，明らかにしなければならない点であろう[63]。日本人の情報センスを解明する上においても実態調査が必要とされ

61) 元Ｂ製鉄所平炉工場工師増田清右衛門氏面接記録（1971年３月20日）

62) 新潮文庫解説目録（1997年４月現在）　新潮社
中公文庫解説目録（1993年２月）　中央公論社
岩波文庫解説目録（1992年）　岩波書店
中公新書解説目録（1996年）　中央公論社
講談社　現代新書解説目録　（1994年９月現在）　講談社
講談社　Blue backs ブルーバックス解説目録（1994年11月現在）　講談社
以上全ての解説目録に当該書籍の出版年の記載が見られない。

63) 岩波文庫の出版目録（３巻本）には出版年が記載されている。珍しいケースであろう。

ている。

毎年出版される膨大な数のビジネス書には，参考文献は云うまでもなく引用文献を明記しないこと及びその出版年も記載していないものが，多いのである[64]。出版年の明記がなければ，それがいつの時点における議論なのかが不明なのである。同じ議論を，繰り返さないためにも発信時点は明確でなければならない。しかし日本のビジネス書の著者や出版社には，印刷スペースを省略するために無視されているのである。

5W1Hを重視し報道する記事に感性を持つ新聞社が出版した書籍にも残念ながらのこうした傾向が読み取れるのである。出版の担当者が著者の原稿の不備を指摘することに意を用いないことが明白である。

しかしこれは記者が，記事を書くときに引用文献の出版年を明記する習慣を持たないことが原因ではないだろうか。あるいは記者の原稿の段階で明記されていても，編集局のデスク段階でスペースの節約のために削除されてしまうのかもしれない。経済効率優先のために情報にとって不可欠な要素が，欠落したまま流通することになるのである。新聞社が独断で読者にとって意味がないと判断して採用しているスタイルが，日本人の情報センスを低レベルに閉じ込める役割を果たしているのではないだろうか。

いずれにせよ日本社会において書物の出版年が，重視されていないということは何を意味しているのであろうか。まずその情報の「発信時点」に極めて鈍感であることを示している。さらに引用文献の出版年を記載しない筆者は，恣意的に自分の議論を組み立てていると言わなければならない。立てたテーマに関して問題の全体像を描くことに関心を持たず，現実社会の歴史的変遷や議論の発展を無視する精神の持ち主であると判断しなければならない。社会的な議論の累積や発展とは無関係に必要と思うトピックスやデータだけを勝手に引っ張り出して議論する人物ではないか[65]。

アメリカやヨーロッパの学会で既に結論の出た議論を，不勉強な日本人研究者が，それを知らずに思い付きで，勝手な議論を展開することに等しいのではないか。

たまたま出会ったグループの議論にコミットして，それが当該ジャンルの中心的な議論であると錯覚するならば，とんでもない方向感覚の喪失である。これから研究活動を開始する若い人々はこうした研究者としては致命的ともいえる知的怠慢に陥らないように細心の注意を払わなければならないのである。

不毛な議論を防ぐためには，リアルな現場経験に基づき問題の所在を確定し，それに関連した研究の全体像を把握するための研究動向のレビューが，不可欠となっているのである。

たとえば北海道では経済の公共事業依存体質の克服が，議論されて久しい[66]。問題は一体いつ頃からこうした議論が繰り返されて来たのということである。戦後の復興期を終えた時点から，産業構造の高度化や自立経済の構築が叫ばれながら，なぜ半世紀を経ても達成されなかったのであろうか？中央政府はなぜ柔軟に政策転換を行えなかったのであろうか？さらには経済界においても企業家精神を発揮して新しいビジネスに積極的に挑戦してこなかったのであろうか？これが解明されなければならない問題点である[67]。

岩波文庫編集部（1987）『岩波文庫総目録（1927～1996）』（全3巻）

64) *Diamond books catalogue* 1997, part 2　ダイヤモンド社　には初版発行年の記載あり。文眞堂　出版目録，東京大学出版会出版目録（1997. Ⅱ）にも初版出版年に記載あり。

65) 不可解にも日本経済の歴史的検討を行う書物において，参考文献の出版年が記されていない。
花井宏伊（1998）『日本経済の100年がわかる本』ダイヤモンド社

66) 中谷宇吉郎（1957）「北海道開発に消えた800億円－われわれの税金をドブにすてた事業の全貌－」“文芸春秋”　昭和年32年4月号

67) 日本経済新聞社編（1988）『北海道プロジェクト新

これらは単に政府の産業政策の問題ではなくて，北海道人の気質や生活態度に深く関る問題であると言わなければならない。主体的な問題解決に挑戦する思考様式を持たない人々によって管理運営される組織の問題を解明しなければならないのである。1997年11月の北海道拓殖銀行の経営破綻に象徴される北海道経済の停滞を，歴史的に検討し，21世紀に向けてその解決策を構想しなければならないのである[68]。また運動論を持った新しいスタイルのベンチャー・ビジネスである北海道国際航空（エア・ドゥー）に注目する必要があるだろう[69]。

時代』　日本経済新聞社
日本経済新聞社編（1997）『漂流する北海道－深まる経済自立への苦悩』　日本経済新聞社
札幌学院大学人文学部編（1992）『北海道の村おこし町おこし』　札幌学院大学人文学部
大学におけるシンポジウムが，記録編集されたものである。北海道の地域開発問題に関して“やる意欲”だけが，議論されている。地方が自主性を持ちえない税制と中央政府の縦割り行政の下での開発計画の歴史的な検討は，何もなされていない。我々が問題解決を実践しようとすれば，過去の累積としての現代が，出発点である。制約条件として発現している過去を，直視しなければ，有効な問題解決策は，打ち出せないのである。
社会的異専門間の交流と議論の広場たるべき大学における議論（シンポジウム）であるからこそ歴史的，長期的な視点に立った問題点の整理とその本質の解明，さらには問題解決の基本理念と具体策の検討が，なされなければならない。

68) 斉藤仁（1999）『旧北海道拓殖銀行論－開業から終戦まで』　日本経済評論社
北海道新聞社編（1999）『拓銀はなぜ消滅したか』　北海道新聞社

69) 米山喜久治（1990）「日米合弁のシャトル便」北海道新聞　1990年10月27日号
羽田空港の離発着能力が，増加しない。航空業界の規制緩和が，近い将来行われないことを前提にした。新しい日米合弁の航空会社の設立を提案している。これを首都圏の米軍基地の返還と民間航空への転換とリンクさせること。さらには千歳の国際空港化には外国航空会社とのネットワークである事を構想したものである。